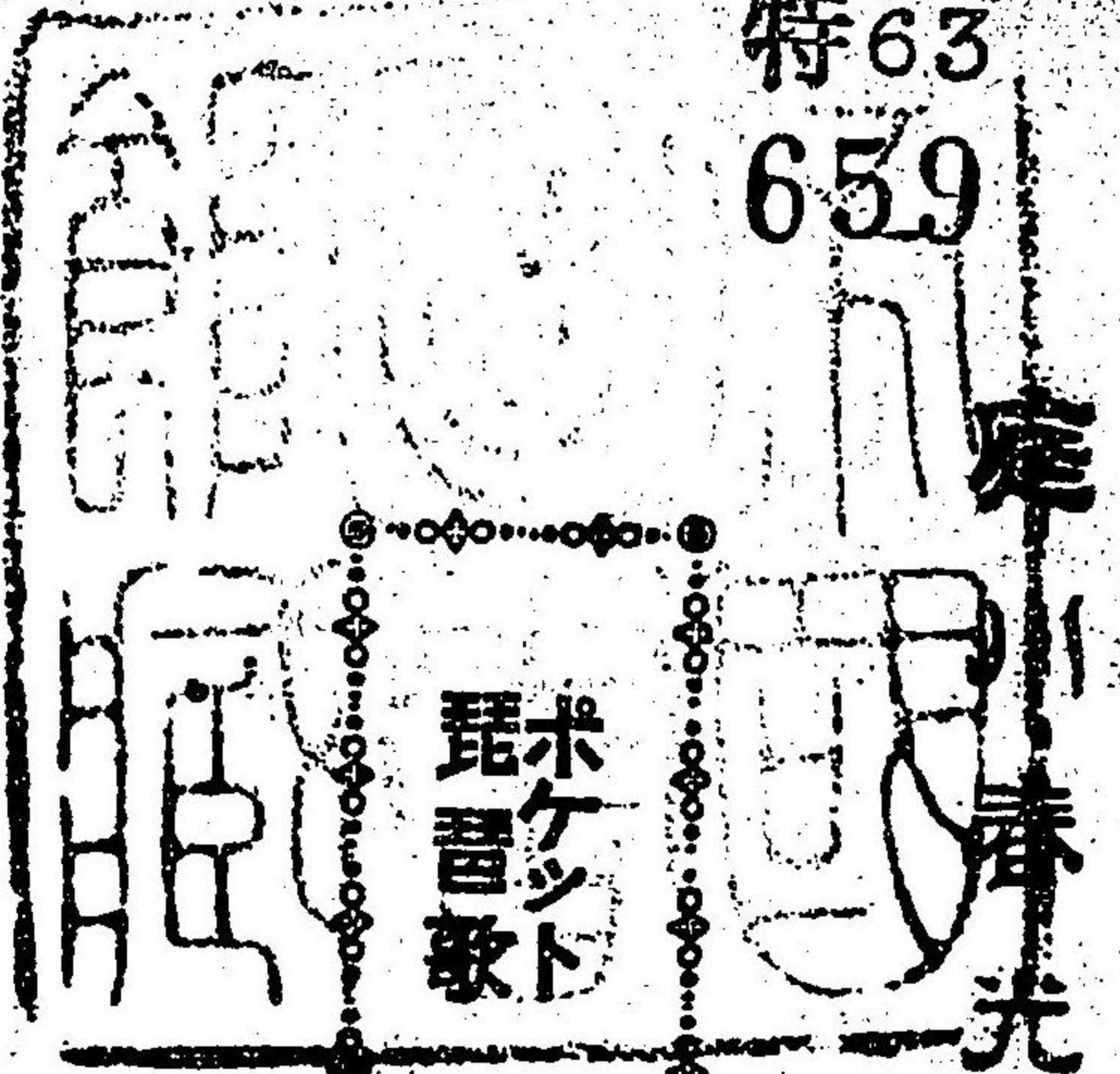


特63  
659



ボケツト  
器書教

寒川春光  
曲譜

鍛練集

東京岸田書店發行

明治  
43. 6. 8  
内交

序

琵琶は、遠く仁明帝の御宇、唐土より、渡來せしものとか、後相傳へて、陣中帷幕の樂となり、士氣振興の具となす、之れ其歌雄渾にして、其曲悲壯を極め、一撥よく、志氣を鼓舞し、精神を奮起せしむるに足るを以てなり。

戰勝後、徒らに、一等國の美名に憧れ、世は漸く文弱に流れんとするに際し、偶々此曲の流行するあり、豈喜ぶべき現象ならずや。

希ふ、花の晨、月の夕に、此尙武的國樂とも謂はるべき琵琶歌を謠吟し、

以て抑促せる鬱氣を散じ、兼て、精神の修養、心膽の鍊磨に資せん事を。

本書は古今の名歌を蒐集し、是に大體の定節たるべき曲譜を付す、曲譜の細妙なる點に至りては、到底記載する事能はざるのみならず、各自多少の相違あらざるなきを顧慮し、特に餘裕を存したる所以なり、以て編者の意のある所を諒せよ、一言陳じて序となす。

編者識

### 凡例及吟者心得

○琵琶歌を謠吟せんと欲せば、先づ文章の意味を了解せし後、始めざる可からず、而して、精神をしづめ、姿勢を正し、熱心に、歌中の人となりて謠ふべし、要は、自然を表情するにあれば、徒らに、聲を美にし、節を妙ならしむるに力むるなかれ。

○琵琶歌は、一句を七五調(假名にて七文字と五文字とを組合せ一句を爲す、例へば『金剛石も『磨かずば』の如し)を以て作るものなれど、往々變則有り、但し茲には變則なきものに基きて説明すべし。

凡例

○發聲法及定節

琵琶歌に依らず、各種の歌を謠ふに當り、何れも其歌の定節を知らざるべからず、今茲に古來よりの定節と、余の考案せしものとを掲げ、容易に是れを知得せしめんと欲す、右は、

大千(○) 切(『) 中干(、) 地(上)(ノ)

地(一) 地(下)(ノ) 吟替(△) 崩(×)

等にして、(一)内は凡て符號なり、從來一定せる符號なるものなし、右は只だ參考迄に、掲げしに過ぎざれば、吟者は適宜取捨せらるべし。

△大千とは、最高音にして、七字を高く、語尾を震はしつゝ、五字に付け、

五字は之より、半分低き聲を出す。(圖解及吟替の項參照)

例「時計の針の絶間なく」

△切、大千と中干との中の音。

甲 始めの切、(圖解參照)

例「誠の徳はあらはるれ」

乙 中の切、大千の聲にて六字を謠ひ、語尾を震はしつゝ、殘の一字

を付く、五字は謠ひつゝ下ぐ。(圖解參照)

例「よきにあしきにならうつるなり」

丙 終の切、謠ひ方は、始めの切と同じなれど、五字の内、一字を殘し

凡例  
置き、圖の如く謠ひ、一寸琵琶の入りし後、残りの一字を謠ふべし。  
例「學びの道にすゝめかし」

△中干大干より一段低き音。

甲 大干後の中干、(圖解参照)

例「めぐるが如く時の間も」より「如何なる業か成らざるむ」迄

乙 地より來る中干、一句目は、中干と地の上との中の音を出し、節付せず棒に謠ひ、餘は大干の次の二句目より謠ふものに同じ。

丙 前の切の前及中の切後ノ中干、(圖解参照)

例「玉の光りは」及「選び求めて」の項

變化 七字の内六字迄、中干に謠ひ、七字目に、中干と地ノ上との聲に移りつゝ、五字を地ノ上より、地ノ下迄、程よく下ぐ、故に六字と七字の間に變化を起す。

例、春の調歌中「常磐の色どたぐひなき」

甲乙共、最後は必ず節付すべし、假に名稱を付して、段落或は止メと云。

例「如何なる業か成らざるむ」

但し甲の切前及乙の切後は、丙の如く謠ふものとす。

△地ノ上 通常の音聲より少しく大なる聲。

前の切の前、及中の切の後は、凡て棒に謠ひ、此の以外は、必ず五

字を節付すべし(圖解参照)

例、前者は「金剛石」及「己に増る」の項、後者は「水はうつはにしたがひて」の如く棒の引きたる五字に節付すべし。

△地 通常の音聲より心持大なる聲。

此音は半音にして、段物には多く使用するものなれば、大に必要の聲なり、又謠出しの始めは、必ず此聲を要するものなり。

例、「金剛」

△地ノ下 通常の音聲より少しく下の聲。

節付せず棒讀みにすべし、只だ少しく斟酌すべし(圖解参照)

凡例

例「其さまぐ」になりぬなり」

△崩 大干と中干の間の聲と、地ノ上及地にて、凡て雄壯に謠廻べし。

崩の大干は、多く二句を以て成る、圖解は右に基きたるものなれど、又二句より成ること有り、斯かる場合は、金剛石の大干に毫も異なることなし、二句より成るものは、謠ひ悪きものなれば、心して謠ふべし。

(圖解参照)

△吟替 悲哀の情を籠めて謠ふ、多く半音なれば注意せらるべし、此

音中に大干の、半段高き聲あり。(圖解参照)

吟替りは、通常八句より成るものなれど、變則多し、圖解は、變則を

凡例

凡例

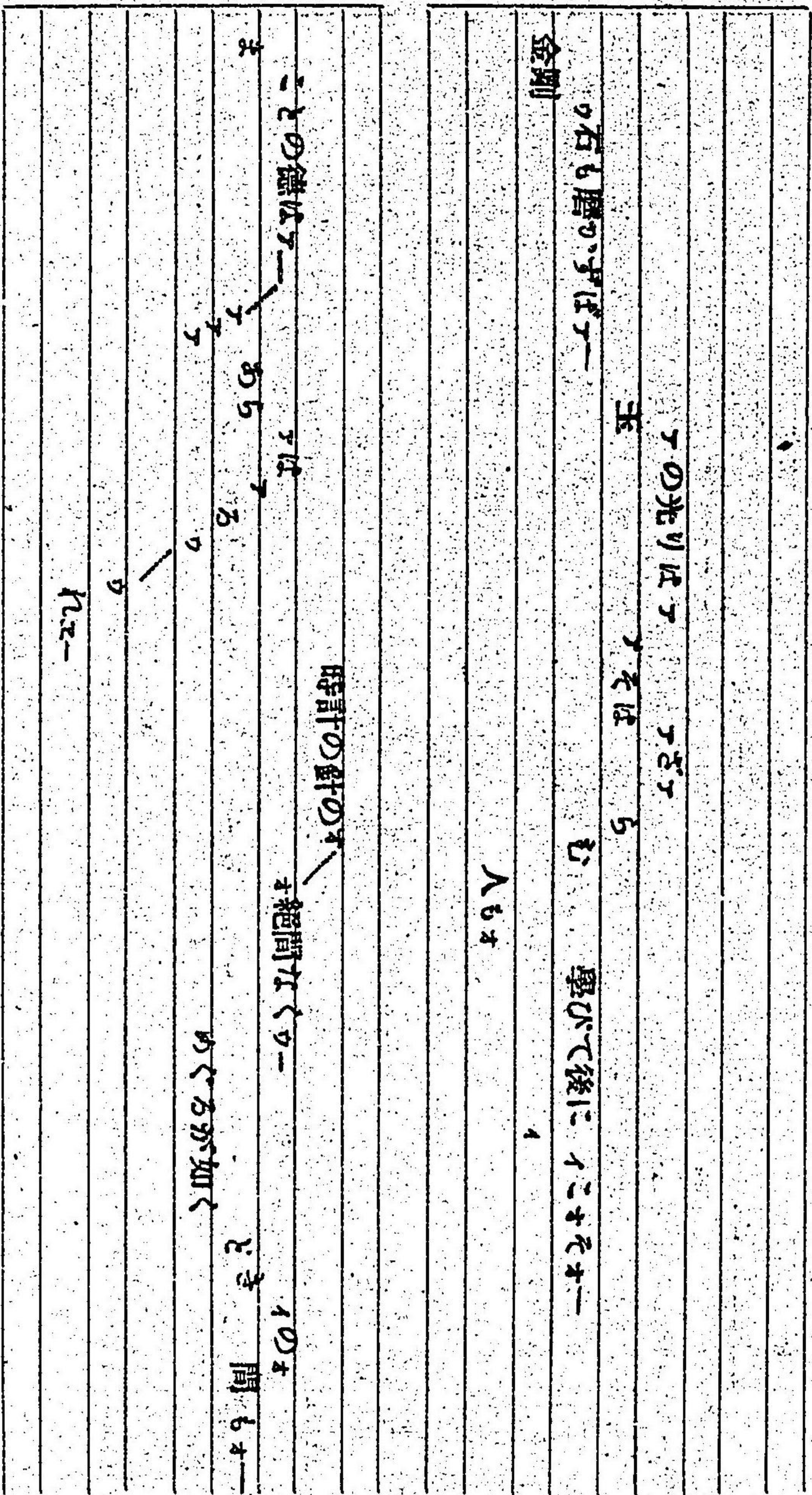
掲げたるものに付、八句の場合は、四句目の「および七句目の「は不用と知らるべし、九句より成るものは、四句目或は七句目を、四句或は八句の節を應用し、七句の場合は、初句を捨て二句より初め、無論四、八句は捨つべし、六句の場合は、圖の四句及七、八、九句を捨つべし、猶他に變則あれど、繁雜の嫌あれば略す、吟者宜しく斟酌せらるべし。

猶右の外、種々小則あれど、悉く筆に盡す能ざるに依り、大體を記述するに止む。編中、一句にて中干と有るは、凡て段落(假名)の節を用ふべし。

庭川春光述

金剛石謠方圖解

九八七六五四三二一  
 九八七六五四三二一  
 本半 地上地地  
 本半 地上地地



九八七六五四三二一 九八七六五四三二一  
本字 中半 地上地地下  
本字 中半 地上地地下

日影おしみて馴かなば  
如何なるわざ  
なる  
も  
水はうつほに  
いた

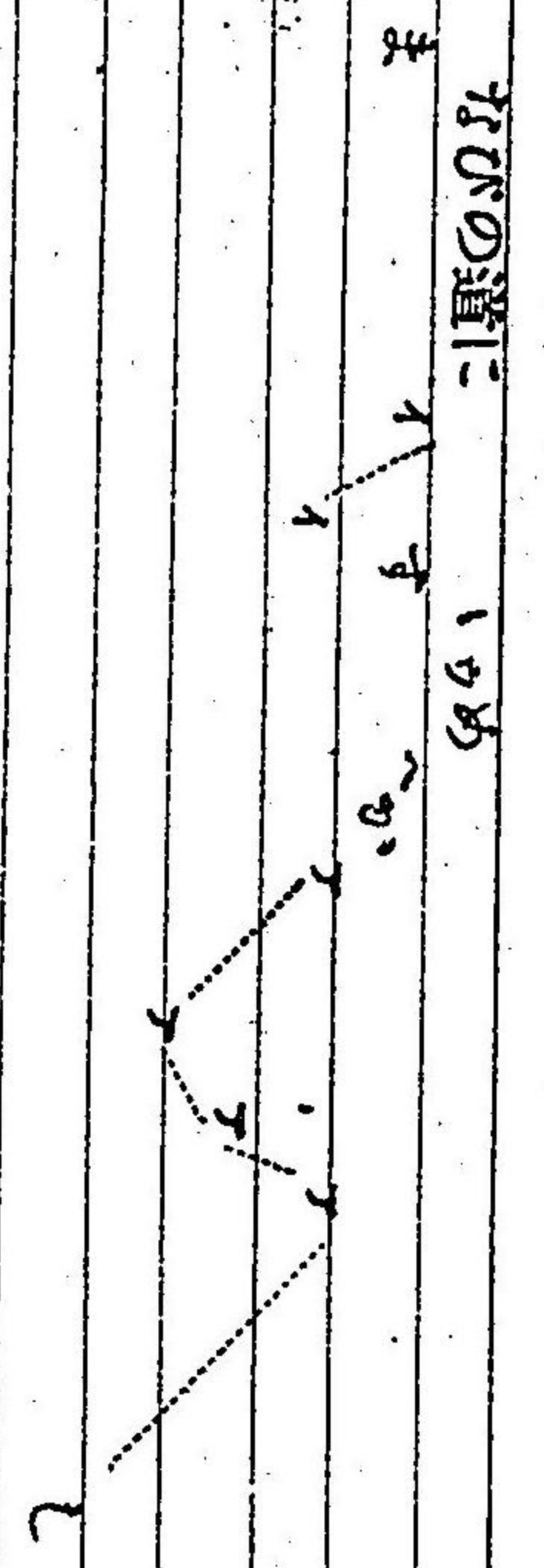
よきにあしき

人は交る

其さまさまに  
わたり  
に  
うらるるがた

九八七六五四三二一 九八七六五四三二一  
本字 中半 地上地地下  
本字 中半 地上地地下

び求めて  
まさるよき友を  
に  
駒にむちう  
か  
心の





崩レ謠方圖解 (城山)

打つ 打た 霧の紅葉の紅のまー血汐に染めど  
つれつわがて散るわー

十年の秋の季まー

明治

本半 地上地地半

九八七六五四三二一 九八七六五四三二一

打ちる玉は板屋打つわあられ 手走る  
薩摩武雄の雄詰にイー かりくにてまー

かへり見ぬわー

薩摩武雄の雄詰にイー

打ちる玉は板屋打つわあられ

手走る

かりくにてまー

本半 地上地地半

一時に落つるが如き有機かまー 隆盛打ち  
木霊にひらくときの聲まー

むかぞなきイー

面を向け

本半 地上地地半

見てまー ほいぞ 笑か

九八七六五四三二一 九八七六五四三二一

本半 地上地地半

吟替謡方圖解 (錦の御旗)

九八七六五四三二一  
 大 中 地 上 地 下  
 大 中 地 上 地 下  
 大 中 地 上 地 下

御歩行  
 雲上人のオ  
 のオオ  
 龍樓鳳閣にイイ  
 人オトオ  
 たりイー 輕軒香車をオオ  
 ぞエマア  
 さわウウ

長途如何にと御供のトオ  
 オオ人々危  
 おもオハ  
 社々のおお  
 のオオ

九八七六五四三二一  
 大 中 地 上 地 下  
 大 中 地 上 地 下  
 大 中 地 上 地 下

御つと  
 宿々のオ  
 めエエ  
 露も意り給はれ  
 働 備をつめる  
 かもま  
 しもオオ  
 見答るウウ  
 のオオ  
 更りにイ  
 なし



河櫻 忠似 老鴛 戀狂 物

内井

蘇のの

のの

宿驛 度蛾 森夢 山女 狂

目次

四三 四一 三九 三七 三五 三三 三一 二九 二七

遠若 墨月 櫻松 迷千 春

木

悟代 の

の

近花 繪花 狩囉 迷千 春調

目次

二五 二三 一九 一七 一四 一三 一一 一〇 九

兒島高徳 ..... 一一一  
 本能寺 ..... 一〇五  
 毒饅頭 ..... 一〇〇  
 國の御柱 ..... 九七  
 奇縁 ..... 九二  
 兵六夢物語 ..... 八七  
 澤陽江 ..... 八二  
 錦の御旗 ..... 七八  
 辨内侍 ..... 七二

目次

小河右王城太武蓬母 ..... 四五  
 中童照 ..... 四七  
 田藏菜の ..... 四九  
 道灌野山誠 ..... 五〇  
 山野 ..... 五三  
 君山 ..... 五五  
 丸君 ..... 五八  
 島丸 ..... 六四  
 督島丸 ..... 六八

目次

元 げん 寇 こう ..... 一一四

那須與市 なすのよ ..... 一一八

賴朝七騎落 よりともしちしきおち ..... 一二四

鉢木の隊 はちのきたい ..... 一二九

白虎隊 びやくこたい ..... 一三七

俊寛 しゅんくわん 上段 ..... 一四二

同 おなじく 下段 ..... 一四五

吉野落 よしのおち 上段 ..... 一四八

同 おなじく 下段 ..... 一五二

目次

小敦盛 こあつもり 上段 ..... 一五六

同 おなじく 下段 ..... 一六三

別れの國歌 わかれのこくか ..... 一七三

常陸丸 ひたちまる ..... 一七六

臺灣入り たいわんいり ..... 一七九

吹雪の敵 ふきせきのてき ..... 一八三

威海衛 威海衛 ..... 一八七

廣瀬中佐 ひろせなか ..... 一九一

橘大隊長 たちばなだいたい ..... 一九四

目次

ボケツト歌 鞞 鍊 集

庭川春光曲譜

皇后陛下御歌

○金剛石

1.

金剛石も磨かずば、中子玉の光はそはざらぬ、人もまな學びて後にこそ、切り「誠」  
 の徳はあらは顯るれ、大子時計の針の絶間なく、中子廻るが如く時の間も、日影  
 惜みて勵みなば、如何なる業か成らざらん、水は器うちはに従ひて、其そのさまぞ

金剛石

まになりぬなり、人は交はる友により、善きに悪しきに移るなり、己に優るよき友を、選び求めて諸共に、心の駒に鞭打て、學の道に進めかし、

平壤

皇后陛下御歌

○平壤

頃、明治の二十七、長月なかば諸軍勢、大同江の急流も、間に打渡り、平壤城に近づけば、砲壘あまた築きたて、盛字奉軍毅

字軍や、其外諸軍すさまじく、隊を亂さず守りしを、我忠勇のつはものは、砲烟彈雨も物とせず、進めくと勇みゆき、面もふらず攻立る、あまたの敵も防ぎ兼ね、秋の木の葉と亂れたつ、烟のうち散りうせぬ、若の上に日の御旗、高く掲げて皇ぎの、御代萬歳と謠ふなり、

○春日野

春日野に、下崩え出づる若草の、年の戸あけて秋津國、霞わたれる片岡に、月は残りて雉子なく、明けの友づる君が代を、壽と祝ふ初

春日野



聲に、南山の、榮え久しき松竹の、落葉かささる諸人の、遊ぶ小川の菊の露、流れもにはふ五百歳の、齡を國にゆづる葉の、朝日かやく富士の峯、大千これを蓬萊山とは謠ひける、中千七寶の峯は、影を湖水にひたし、木々の梢も荒磯の、月海上に浮びては、兎も走る浪の上、緑樹影沈みては、魚木にのぼる風情かな、五風十雨の御代の春、切り『四海もなびく時津風』君が治むる御代なれば、いく萬代までと、切り『祈らぬものこそなかりけれ、』

○國 船

雲に聳ゆる高山も、中千登らばなにか越えざらむ、空を浸せる海原も、切り『渡らば終に渡るべし、』大千我秋津州は茜さす、中千東の海の離れ島、例へば海のたなかに、浮べる船にさも似たり、二萬方里の船の中、四千餘萬の乗組あり、船の主の指揮を受け、大千文明海に進めゆく、中千水主楫取多かるに、我等も楫子の一人なり、船のゆく手は和田の原、八重の沙路の遠ければ、颯さかなく折もあり、切り『高浪荒るゝ時もあり、』船手の業に習はずば、はやて高浪凌ぎ得て、切り『思ふ港にいかで着くべき、』

○母の教

七卿落

やよ正行よ正行よ、中平まささなきことなしたまひぞ、父が汝を歸せしは、  
 若木の繼穂に橘の、中平「實のなりいでん爲めならず、」大平吉野の山の春の  
 月、中平光は見えぬ世なりとも、錦の御旗翻へし、楠氏のはらからの、あ  
 らむ限は君の爲め、斃れて止めとの御遺言、大平仇になさじと立歸り、中平  
 汝妾に告ながら、其舌の根もかわかぬに、早くもその事忘れしか、忍び  
 難きを忍びつゝ、中平「忠と孝とを全ふし、」君の御心安むぜよ、親の御靈  
 も慰めよ、中平「まさなき事なしたまひぞ、」

○七卿落

七卿落

世は苜蓿と亂れつゝ、中平茜さす日もいとくらく、蟬の小川に霧立ちて、  
中平「隔ての雲となりけり、」大平あら痛ましやたまさばる、うちに明暮宿  
 直せし、實美朝臣に季知卿、壬生、澤、四條、東久世、其外錦の小路殿、  
 身は浮草の定めなき、旅にしあれば駒さへも、辭進みかねてはいばへつ  
 つ、降りしく雨の絶間なく、涙に袖の濡れ果て、大平これより海山淺茅  
 原、中平露霜分けて蘆が散る、なにはの浦にやく鹽の、からき浮世はもの  
 かはと、ゆかむとすれば東山、峰の秋風身にしみて、朝な夕なに聞きな  
 れし、妙法院の鐘の音も、中平「冴えて今宵は哀れなり、」いつしか暗き雲  
 霧を、中平拂ひつくして百敷の、中平「都の月をし愛で給ふらん、」

○送別

茜あかねさす、我わがが日ひの本もとに人ひとといふ、中ちゆう人にんのうちより選えらまれて、海うみ原はら遠とほく浦うら  
 浦うらの、浪なみの花はな吹ふく異こと國くにに、わたり行ゆくなる君きみが名なと、切り『譽ほまれは世よ々に残のこる  
 らむ、』大だい千せんこゝに船ふね出でを祝いわはむと、中ちゆう心しんをこめて足あし曳ひの、山やまにも狩かりり得え  
 海うみに釣つり、川かみにすなどり野のに求もとめ、なほあきたらで鳳ほうをささ、麟りんを屠ほり  
 て盃さかづきを、勸すすむるうちにかたへより、吟ぎんずる聲こゑの高たからかに、

渭城朝雨濕輕塵

客舍青青柳色新

勸君更盡一杯酒

西出陽關無故人

古ふるき調しらべの唐から歌うたに、思おもひをよせて別わかれをば、をしむ心こころもなつかしく、皆みなとり

どりにまた酒さけを、切り『勸すすめて興きようをぞ添そへにける、』暫しばらくありて一同いっどうに、  
 中ちゆう千せん盃さかづきさげ起た立たして、君きみ萬ばん歳ざいと唱となへけり、切り『君きみ萬ばん歳ざいと唱となへけり、』

○春の調

新あらた玉たまの、年としの始はじめの壽ことぶきや、中ちゆう千せん昔むかし變からず吹ふあぐる、笛ふえと鼓つづみの音おと迄までも、切り  
 『春はるの調しらべべに聞きえつゝ、』大だい千せん玉たまだれゆらぐ風かぜ立たて、中ちゆう千せん舞まの袂たもとも長なが閑ひらなり、  
 神かみの井い垣がきの老おい松まつも、枝えだを連つね葉はを重かさね、うべも大たい夫ふの影かげ高たかく、齡よはひを君きみに  
 ゆづる葉はの、神かみ常とこ盤ばんの色いろぞたぐひなき、軒のきば端はに咲さける梅うめが枝えも、和いづみ泉み式しき部ぶ  
 のゆかりとや、ゆかしく薫かほる窓まどの内うち、文ふみ見みる袖そでにうつりくる、大だい千せん好この文ぶん木ぼく

千代の春

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇  
 の名に恥ぢず、申又高砂住の江の、松に相生の尉と姥、妹脊の契り末長  
 く、千代のためしに引かれつゝ、四方の海原浪なきて、吹くも静けき時  
 津風、切『枝もならさぬ御代の春、』千秋樂には民をなで、萬歲樂には  
 命を延ぶる樂も、年毎の、今日汲みかはす盃に、君と御國を祝ふなる、  
切『松籟こそ目出度けれ、』

〇千代の春

斯かる目出度き御代なれば、申國々所々に至るまで、千代の春、切『千  
 歳の秋と楽しむも、』大千皆これ君の惠深き故どとて、申いよゝゝ君を仰

ぎ奉る、思ひくの殿つくり、いらかを並べ軒を連らね、高殿樓閣にか  
 まへつゝ、朝日の光月の影、うつる光の輝くも、ことも愚に思はれて、  
 庭には金銀の砂をしき、四方の園みも夥し、不老門を出入る人は、袖をつ  
 らねて色はゆる、是れぞ名に負ふ華衣喜見城の、切『都の春もかくやあ  
 らん、』かほど治まる御代なれば、吹風までも枝を鳴さじと云へば、又  
 人として君が代を、千代萬代までと、切『祈らぬ者こそなかりけり、』

〇迷悟もどき

世の中は、迷ふが故に三界は暗し、一心悟れば、申十方世界はひろくし

迷悟もどき

て、地獄の餓鬼も我にあり、『彌陀も浄土も他にあらざる、』大佛とは何  
 を岩間の苔衣、中た、其まゝの姿にて、慈悲より外に宿心はなし、諸事  
 何事も腹は立つとも言葉は残せ、言葉少なく純直にして、濁る心を澄み  
 やかに、誰も人には情あれ、なさは人は人の爲めならず、廻りくつて小車  
 の、中平後は我身に報いくる、されば古人の言葉にも、中平聖人は人を謗ら  
 ず、大海は塵をえらばず、仁者に敵なしとかや、枝高さとして風には脆  
 く、あだ折れぞする、憎まるゝ人には尙能くしなへ見よ、後には深き友  
 となる、善悪は友にこそよる、友は鏡となるものぞかし、我が善きに人  
 の悪しきは無きものよ、たゞ何事も悪しき心を捨て、見よ、『何國の

里にも住みよかるべし、』皆人は、我智我慢我力我心を捨て、見よ、彌  
 陀たのむ心は西へ空蟬の、切り『もぬけ果てたる身こそ安けれ、』

○松  
 囃

新玉の、年立ちかへる春の日に、中平君が齡は千歳ふる、松囃とて數なら  
 ぬ、我等如きもゆるされて、切り『聞くもなかく面白や、』大平鼓は四海の  
 浪の音、中平笛は龍王の吟ずる聲、名も高砂の尉と姥、是ぞ盡させぬ妹と  
 脊や、神の御前は鈴鹿山、悪魔を拂ふのみならず、弓矢の譽残されし、  
 田村麿の御威勢は、今が世迄もゆづる葉の、しめひき廻す筒井より、汲

松 囃

櫻狩

めどつさせぬ若水は、中平老を養ふ便りとかや、大平さて其次は春の花、  
 串都に聞えし三條の、古鍛冶宗近は、心正直にして、神慮に叶ひし名刀を、  
 造り出して今太平の御代となり、中平古き詩にもあるぞかし、長生殿の  
 内には春秋に富み、不老門の前には、日月遅しと申せしが、其心を學  
 ばれて、今彼の御代と云ふ告の、切り『とりくなれや梓弓』やたけこゝろ矢竹心の一  
 つなり、又英雄の交りは、切り『頼みある中の酒宴かな』

○櫻狩

霞たなびく山々の、中平さかりの花をながめむと、いななく駒に鞍おかせ、

東雲近くあさぢふの、切り『芝の庵をたゞひとり』大平時〇〇〇〇はなれし鶯の、  
中平聲を聞きつゝ、春の野に、萌ゆる草葉の露わけて、進むる駒のたてがみ  
 に、みだれかゝれる青柳の、糸を傳うて朝風の、吹くともなしにゆかし  
 香を、中平送りて我をさそふかと、思ふばかりに遠近の、梢は雪か白雲  
 か、景色妙なる其さまに、うき世の善悪も打忘れ、しばし木蔭に立より  
 て、矢立の筆をとりあはず、

薄命能伸旬日壽  
 零丁借宿平忠度  
 志賀浦荒翻暖雪

納言姓字冒斯花  
 吟詠恨風源義家  
 奈良都古簇香霞

櫻狩

櫻狩

南朝天子今何在

欲望芳山路更餘

と書きつゞけたる水莖を、あとに残して花の香を、風のまにくとめくれば、こゝは盛りをはや過ぎて、散りしく花は野に畑に、中干飛びかふ蝶の如くなり、嗚呼世の中は鳥羽玉の、夢かうつゝか昨日まで、榮えしものゝ今日ははや、見る影もなくなり果て、うき世の中とかこちつゝ、今更それとゆふ暮の、鐘の音さへ身にしみて、昔をしのぶ人もあらむ、さはさりながら花の木も、また來む春にめぐりあひ、貧しき人もいつまでか、中干時めく時のなからめや、榮枯盛衰は世の習ひ、たゞ玉鉾の道理を、切り「たどらむ外はなかりけり、」いざ歸らむと乗る駒の、手綱か

ひぐる其袖に、花の吹雪はかゝりけり、切り「花の吹雪はかゝりけり、」

○月花

月と花とは昔より、誰が楽しまぬ人やある、切り「誰が喜ばぬ人やある、」  
 大干さはさりながら月花も、中干心につれて憂きことの、種となれるも多からむ、足柄山の松風に、吹合せたる笙の音も、是より遠く奥州へ、軍といへば身の末は、死ぬか生くるか白河の、中干關をば雲やへだつらむ、勿來の關の春の暮、駒を止めて詠むれば、都の空は花曇り、鎧の袖に散りかゝる、櫻の雪は將軍の、中干鬢の霜より尙白し、大干鞍の枕に夜は慣れて、秋

月花

の哀れも知らざれど、越山の月のいと白く、雲間を渡る雁がねも、故郷の空に歸るぞと、思へば我もなつかしく、花の都は荒果て、何所が我身の置所、こよひ一夜の宿頼む、櫻の露に袖濡れて、滅亡時に極まりし、平家の末こそ悲しけれ、佞人輩の讒により、諫の言葉容れられず、二人ともなき賢臣は、筑紫の浦の住住ひ、御衣を拜して涙なる、心の底は如何ならん、我が君今は賊の爲め、遠き島路に行き給ふ、無念の心やるせなく、十字をしるす櫻の木、我が赤心を申さむに、半などか他言を要すべき、月の光や花の香や、幾萬年を経るとても、更に變りはあらざるに、常なきものは世の治亂、月を見て酔ひ花を見て、眠れる春の手

枕も、たゞ一場の夢の間に、移る興廢存亡の、御世のなりゆきぞ無常なる、もしも世運の拙くて、上には君を煩はし、下には民に苦勞させ、國の亂るゝ其ときは、月の光は輝くも、花の色香はにほふとも、半など樂のあるべきぞ、されば世間のもろ人よ、赤心引起し、國の光を東海の、月よりもなほ輝かし、國のほまれを美吉野の、花よりも尙芳ばしく、切り「すこそ今の勤なれ、」誓て斯くもなせし後、たのしみ月見をしてみたし、切り「たのしみ花見をしてみたし、」

○墨繪



心とは、何をいふらん不思議さよ、中墨繪に書きし松風の音、況や此世を、諸法實相と聞く時は、峰の嵐も法の聲、邪正一如と見る時は、切り「迷ひも悟もなかりけり、」大萬法一如と觀すれば、中谷の朽木も皆佛、さのみ不審はなかりけり、三界に身は安からむ小車の、我惡業に引かれ來て、錘の紐を何時か解くらむ四つの邪の、一つの箱にたゞまれて、中何時も苦しき貪慾の、深き流れに身を沈め、浮ぶ甲斐なき、我が身一つを如何にせむ、夫れ人間の習ひにて、昨日の迷ひを今日さとする、されば如何に悟りし人とて、明日は迷ひし事もあり、人の上とてさのみいふては如何がせん、物の報いは物事にある、埋れ木に如何なる花や咲きぬら

む、中實になりてこそ思ひ知らる、豫て後生を思ひ知れ、大生は死の本逢ふは別れのはじめぞと、中誰かいひけむ言の葉なれど、昨日今日とは思はざりけり、皆人は、時に至りて歎き哀しみ、袖に露置くばかりなり、生死はげしき世の中に、人には長く添はぬものよ、たゞ何事も腹は立つとも言葉は殘せ、大千歳此世にある身の如く、慳貪邪見は諸事無益、僅か此世は假の宿、氣をあさくと心廣くも能く持ちて、法の道には誰も深かれ、地獄極樂たゞ一すじの道理を、誰に尋ねん、佛ならでは知ろし召されず、中佛とは何を岩間の苔衣、たゞ其まゝの姿にて、慈悲より外に宿心はなし、これにつけても皆人は、地獄極樂いづこにあると思ふら

む、胸の間にゐると聞け、夫れ人間の如何に契りし、親子兄弟朋友夫婦の中迎も、この世計りの契なり、死してゆく身の野邊迄は、娑婆の情に我もくと供を致せども、野邊より先はたゞ一人ゆく、先立つ者こそ哀れなり、今日迄は人を送りて歸りしが、いつ又我は送られて、人をかへさむ涙川、幾瀬渡るも淵なれば、御法の船こそ戀しけれ、これにつけても皆人は、老若男女に至る迄、慈悲をも願へ、慈悲萬行の功力にて、後の世まで極樂の、涼しき風に悟り浮べば、即心成佛疑なし、身は得脱の縁となる、たゞ人間の、『なげきの中の喜となる、』

○若木の花

大和心の花と咲く、其櫻井の驛より、汝をこゝを歸すとして、教へ給ひし父上の、『言葉は既に忘れしか、獅子は生れて程もなく、千尋の谷より刎かへり、梅檀は二葉より、高さかほりを放つなり、汝幼なくありとても、父が子ならば能くおもへ、腹切れとては歸されず、跡を弔へとも宣はず、我打死をしたりとも、大君まします限りには、一族郎黨いたはりて、軍を起し朝敵を、攻め亡して御心を、安め申せと遺言を、妾にこそは傳へしが、傳へし汝早や忘れ、自害せんとは愚なり、血迷ひ

若木の花

たるか正行と、母の言葉に鞭打たれ、心の駒を立て直し、童遊の軍にも、朝敵を討ち尊氏を、斬らんと思ふ外はなき、心の内こそ勇々しけれ、かくて月日によどみなく、さかりの齡になりぬれば、家の子あまた引連れて、吉野を守護し奉り、處々の戦に、功名手柄あらはして、末頼もしき若武者と、帝も思ひ給ひしに、逆賊高師直等、雲霞の如く群りて、吉野の宮を攻めんとす、正行帝に奏すやう、君の御爲め父の爲め、命を捨て、忠孝の、名を留むべき時來り、敵の首を取り來るか、臣が首を取らるるか、群二つ一つの軍せむ、これぞ最後の御目見得と、涙を袖にかければ、南殿の御簾をまかしめて、御前近く召させられ、

二度の戦に打勝ちし、功を深くめで給ひ、股肱と頼む汝なり、其身を軽く思ふなど、いとも畏さ勅諭に、答へ申さん言葉なく、塔の尾さして罷り出で、如意輪堂に敷島の、大和言の葉彫り付けて、四條畷に打出で、目に餘りたる大軍を、右往左往に切り破り、あくまで敵をなやまして、飯盛山の山麓に、草むす屍大君の、爲めに死したる大丈夫は、實に獅子よりも勇ましく、梅檀よりも芳ばしき、名を後の世に残しけり、名を後の世に残しけり、

○遠近

遠近

遠近の、立木も知らぬ山中に、中覺束なくも呼ぶ小鳥、聲は聞けども、  
『鴉の嘴にて逢はぬ君かな、』大何時ぞやの比掛られし、中言葉の末が思  
ひとなりて、忘れもやらで如何せん、夫れ打解けて聞く時は、鳥は音に鳴  
く蟲は聲々、花は色々咲き亂るれど、中盛りの花こそ惜まるゝ、戀しき文  
は見ぬこそよけれ、心盡しの身は蛤にあらねども、中文取る度に濡るゝ  
袖かな、ほさじや袖は朽ちるとも、涙こそ戀しき人の形見とはなれ、我が  
戀は彌生の空の時鳥、人こそ知らね鳴かぬ夜はなし、古の賤の苧環繰返  
し、昔を今に成すよしもがなと、思へば昔花盛り、春ぞ戀しき鶯の、梅  
の古木にまどろみて、中『盛りの花を夢に見るらん、』我が戀は深山隠れ

○物狂

の岩躑躅、おどろが下のかき蕨、己れの畑の土筆、思ひ惚るれど知る人  
なければ、惚れての後は、中『身はまづ菜とぞなりにける、』  
風かぜに柳やなぎ、亂れ心こころや狂くるふらん、中胸むねのほむらが身みを焦やす、恨うらめしの浮世うきよか  
な、中『嗚呼あうらめしの此世このよかな、』大この里さとの人の心こころが善よ悪わるなくて、中谷  
の埋うれ木き朽くちくちくに、揺ゆり立たてられて君きみと我わが、別わかれくちくに鳴な海う瀉せ、身みの終は  
りこそうたてけれ、思おもひ出いづれば今いまは早はやや、我わがが故郷ふるさとに住家すまかなし、いざ  
さらば、思おもひ立たつ田たの戀紅葉こいもみぢ、夜半よはの嵐あらしに誘さそはれて、散ちりくちになる、

一葉の船も焦れ出で、水の面に浮浪繁き身にしめれば、或時は君を恨み、又或時は身を歎き、心狂氣になり衣、身に餘りある涙川、深き流れに身を沈め、浮ぶ甲斐なき、我身一つを如何にせん、時知りて花も涙や注ぐらん、鳥も別れを惜みてぞ鳴く、命の輕きことは只、飛花落葉の如くなり、君を思ふ心は常に是れ高山、其一念は五百生、懸念萬業無量劫に至る迄、これ又何の因果ぞや、何れ思ひはなかく、に、浮世にありしあり顔の、娑婆の務も益はなし、併し浮身を捨て果てんとは思へども、流石又輪廻の浪の立つ間にも、其面影が身に添ひて、片輪車の風情にて、遺る方もなき胸の中、今は路頭も憚からず、泣きつ笑ひつ安か

らねば、『物狂ひとや人のいふらん、』

○狂女

人間の世のありさまを、半心に留めて按ずるに、一度は榮へ又一度は、衰へる事もあり、水も流れて又其水上に、『歸らざるが如くなり、』大干祇園精舎の鐘の聲、諸行無常をあらはして、飛花落葉は目のあたり、只徒らに過ぐる身は、夢の中なる夢なれや、其古は我れながら、美人の姿人にも勝れ、窈窕の花と飾られて、今を盛りの花柱、掛け巻くも忝くも、我君の御側近く召使はれて、月見花見の御遊の供、錦の褥玉の翠

狂女

簾、明け暮れ馴れし身なれども、人一度榮え花一時に、移れば替る身の  
 憂さを、其寵愛も枯れぐに、今は憔悴と衰へて、唯何事も妹背の契  
 り、淺衣の薄さ縁と成り果て、中平哀れ果敢なき我が身かな、人生婦人の  
 身となる事なかれ、五十年過ぐるは夢の中、僅か百年が間の樂も苦も、  
 他人によると伯樂天が、書きたる詩の心も、中平今身の上に知られたり、  
中平「哀れ唯柴の庵に人ならして、獨り涙に伏沈む、耿耿たる残んの燈火、  
 幽にして壁に添ひ、瀟湘たる夜の雨、窓打つ音迄も、恨みを添ふる媒と  
 なる、」餘り恨の數の重りて、中平唐土迄の思ひ草、哀れ貴きも賤しきも、  
 物思ふ身は異ならず、流れは同じ水なれど、中平「淵瀬と變るが如くな

り、』唯人間の因果を廻る小車の、我が惡業に引かれ來て、中平「斯かる浮  
 身をや焦すらん、」

○戀の山

往昔に、誰が踏み初めし戀の山、しげき小笹の露分けて、中平「今日もや  
 袖をぬらすらん、」大平かゝる暗路は荒磯の、中平濱の眞砂の數は物かはと、  
 傳へ聞く、陽明帝は二八の春の花の頃、心盡しの遠山の、未だ見ぬ花に  
 あこがれて、勿體なくも玉宮を、忍び出でさせ給ひける、野飼の牛に吹  
 く笛の、音のみ聞て泣き給ふ、光る源氏は照りもせず、曇りも晴れぬ

戀の山

春の夜の、朧月夜に名をたて、身はうき須磨のさすらひに、調ぶる琴の音に通ふ、松の嵐をかたしきて、結ばむ夢のよもすがら、袖こそ浪に浮き沈む、扱ても短かき玉の緒の、絶えて其名は親王の、御墓の石に延びまよふ、定家桂の其執心も、猶も残りて在原の戀せしと、御手洗川にせし御稜、百夜通うて一夜だに、逢はねど終に深草の、群露と消えにし人もある、霞を食ひ霧を呑み、不老門の内にして、飛行自在を身に得たる、一角久米の仙人も、亂れ心や九十九髪、身は浮空に鳴る神も、中手雲の絶え間に落つとかや、泥してや凡夫に於てをや、高麗唐土の戀衣、宋の驪山宮の私語を、誰が聞き傳へ、切り『今の世迄も残すらん、』戀は果なき

武藏野の、草のゆかりも懐かしや、思ひ廻せば小車の、我と我が身を苦むる、此迷ひこそ果敢なけれ、中々に思ひ染めしは紫野、切り『濃きも薄きも物や思はじ、』

○鴛の夢

我が戀は、鴛の夢かや見ては唯、中手語らで暮す因果なり、思ひに餘る折節は、門に立ち出で月を詠め、花を見て慰まば、其間なり共忘れつ、切り『涙の雨の晴やせん、』大斯かる歎きの有様を、中手に誓へん片絲の、逢はぬ契りも徒らに、何しに深く願ふらん、ありし昔の我戀は、似たるも

有るや古歌に有る、露もげに、逢はでや果てん片絲の、よるくごと  
 思ひのみすると、連ね置かれし言の葉は、中干今身の上に知られたり、然  
 ば聞くにや津の國の、生田の川には戀故に、身を捨て果てし人も有り、  
 又柏木衛門督は、女三の宮を戀ひ奉り、終に其戀遂げ給はねば、富士の  
 高根を我胸は、烟比べにあてがれて、中干終に戀死召されたり、猶も譬へば、  
 武藏の國の住人、熊谷次郎直實は、無官太夫敦盛を、詮方なくも手に懸  
 けて、其れが一期の思ひとなり、鎧の袖を墨に染め、其名を蓮生法師と  
 様を替へ、新黒谷に引籠り、三年が程は終夜、百萬遍を唱へける、之も  
 敦盛最期の時、一言の言葉の交はし有る故に、中干武士の情もあるぞかし、

たとへても譬方なき我が戀は、あらはに燃ゆるものならば、何と駿河の  
 富士の山、山「淺間が嶽とは謂はれまじ、」花も仇なる朝顔の、露の間な  
 りと逢ふものならば、山「夫れで思ひも晴れてゆく、」

○老蘇の森

數ならぬ、身にさへ年の積るかな、老は人をも嫌はざりけりと、連ねお  
 かりし言の葉も、山「今身の上山に知られけり、」大干されば此世山に生れ來て、  
中干生老病死の四つの苦は、逃るゝ人として更になし、此また四つの苦の中  
 に、いづれ差別はなけれども、中干中にも老苦が哀れなり、天のことを我が



老蘇の森

身みになして、思おもひやるだに古いにしへは、容よう顔がん美び麗れいの姿すがたして、月つきや花はなや人ひとにも  
 見みられ、かりそめの道みち行ゆきぶりに花はなをも送おくられ、又また文ふみ玉たま章まじをとりかはし、  
 傘かさのはづれのあいまより、人ひとを見み初はじむに目め元もとまで、嗚あ呼あはづかしやと思おも  
 ひしことも、中ちゆう干かん夢むかとさめてぞ昔むかしなり、たゞ人にん間げんの衰おとろふる、姿すがた見るたび口くち  
 惜やしさに、いと年としは増ます鏡かみ、涙なみだにもる、哀あはれさを、詩しにも歌うたにもしるさ  
 る、白しやく髪かみ重ちゆう來らい一いつ夢むの中なか、昨けつ日にち迄いた乘まりて遊あそびし竹たけの駒こま、今けふ日は早はやや、  
 老らうの道みちゆく杖つゑとたのまむ、またかはりゆく鏡かみの影かげを見る度たびに、老らう蘇その森しん  
 のなげさをぞする、と連つらねおかれし言ことの葉はが、今いま身みの上うへに知しられた  
 り、たゞ人にん間げんの、此この世よにあるはうたゝねの、り『夢ゆめか現うつの間あひだなり、』

○似蛾

つら〜有う為み轉てん變べんの世よを觀くわんずるに、中ちゆう干かん花はなも紅くわん葉はも一いつと盛さかり、況いはんや人ひとも一  
 と盛さかり、人ひとの齡よはひが花はなに似にて、『咲さくは遅おそうて散ちり易やすし、』大たい干かん散さんりゆく花はなは  
 根ねにかへる、中ちゆう干かん花はなは散ちりても木きさへあれば、また來きん春はるは枝えだに戻かへりて花はなを  
 咲さく、鳥とりは古ふる巢すに歸かへると謂いへど、夫それ人にん間げんは、死しして再またび後あとにかへらぬ  
 死し出での山やま、如い何かなる人ひとのふみそめて、行ゆくも歸かへるも迷まよひの深ふかき涙なみだ川がは、親おやの  
 別わかれに子こを連つれず、又また子この別わかれに親おやそはず、獨ひとり生うまれて獨ひとり行いくこそ、  
 たゞ冥めい土どの營いみを、疑うたが心こころあらずして、常つねに唱となへし念ねん佛ぶつは、中ちゆう干かん之これが淨じゆ土ど

似蛾

似 蛾

の寶なり、さればにや、こゝに一つの譬へあり、半似蛾と謂ふ蟲は如何なれば、己が姿になき蟲を、之れを我が巢に集めつゝ、心を盡して祈りせば、我に似ることあるぞかし、我等如き迷ひの深き衆生も、かほどに深く祈りなば、などかするしのなかるらん、唯心の淨土、己身の彌陀と聞く時は、十萬億土の極樂も、こゝを去ること遠からず、皆人は、此理を知らずして、罪をつくるぞ果敢なけれ、罪は來世の火の車、善は淨土の蓮なり、たましく此世に、人間衆生と生れ來て、後生前生を願はずば、何時の世にかは浮ぶべき、』

○忠 度

壽永の昔義仲は、中平木曾のみやまを立出で、旭の上る勢にて、既に都へ攻上ると聞えしかば、『平家の騒ぎ限りなし、』大急ぎ御幸を促して、西の方へと落ちにける、薩摩守忠度は、たゞ七騎相具して、落行道より引返し、五條の三位俊成の、許に立寄り懇懃に、見參請うて申すやう、かかる身として憚あれど、此年頃は世の亂れ、天下の騒ぎしきりにて、一門の運盡き果て、中平日ならず亡びん事疑なし、然れども、世靜まりて後、勅選の沙汰候はん、さるを君には勅を受け、歌を選ばせ給ふとか、

忠 度

我身こそは謂ひがひなけれ、此道に名を残さむは、前世の面目なれば、兼て詠じ置きつる腰折なれど、一首なりとも、御惠を蒙らば、草葉の蔭にありとも、嬉しからんと巻物を、籠の中より取りいで、渡されけるに俊成も、忘れ形見を見るよりも、涙に袖をぬらしつゝ、さて勅選の其時は、よしなに計りひ申すべしと、宣ひければ忠度は、斜ならず喜びて、今は野山に屍を、晒さば晒せ西海の、浪に沈むも浮世には、残る思ひはあらまじと、甲の緒を引しめて馬に乗り、西をさしてぞ馳せにけり、千載集に一首を、残されしは忠度の、心の誠、實に人を動かせしにや。

さし浪や、志賀の都はわれにしを、

昔ながらの山ざくらかな、

といへる古歌は、めではやされて今の世に、  
『知りぬ人こそなかりけり、』

○櫻井の驛

世は浮雲のゆきかひて、またもや曇る五月暗、山ほととぎす血に啼て、たてし策さへ容れられず、武運につきし身はとまれ、  
『嗚呼我が君を如何にせん、』  
吾若し死すと聞きまさは、黒木の御所の板びさし、北山

櫻井の驛

風の射る矢をば、防ぎかねつゝ世をわびて、御衣の袖も五月雨の、哀れ  
 如何にや歎かれん、聞けよ正行さすがにも、獅子は我子を産みて後、や  
 がて高嶺の巖より、雲千仞の溪底に、中干突き落してぞ氣を試す、情のなき  
 が情ぞや、況や汝今既に、年は十歳にあまりあり、父が今はの一言の、  
 耳にとまらば若竹や、まだうら若き身ながらも、中干教のふしに違ふなよ、  
 ○○○○○○大干さて此度の一戦に、中干天下の安危定まれり、汝が顔を見むとも、これを  
 限りと思ふなり、正成死せば忽ちに、代は尊氏に歸すなりん、露の命の  
 いと惜み、爲に多年の忠も義も、打忘れつゝ逆賊の、軍下に降ることあ  
 らば、我れ父ならず汝等は、中干我が子にあらず臣ならず、若し一族の一人

○河内の宿

だに、中干生残りてぞあらんには、金剛山の城枕、引籠りつゝ戦へよ、是れ  
 第一の忠なるぞ、是れ第一の孝なるぞ、香は千秋の末かけて、にはふた  
 めしと菊水の、形見の刀西東、わと見かへりて別れゆく、その中空の  
 五月雨に、切り『なく聲高しほとゝぎす、』  
 散るを習の櫻井の、切り『教の露に袖ぬれて、』大干かへらぬ父の歸りをば、  
 中干待つや河内の宿の戸を、叩く水鶏の音にさへ、出で、幾度眺めけむ、  
 降りそふ雨の夜を更けて、なに松風のさはぐらん、心△△△△△△の波をしづめつ

河内の宿

つ、敵が情の贈物、開けば哀れ思ひさや、父が血汐の首級とは、色は青  
 ざめ目はとどて、齒をくひしはる御姿に、母は涙の玉あられ、無念は同  
 じ正行は、父が形見の刀もて、すでに自害と見えにける、母は小腕にと  
 りつきて、聞かずや汝梅檀は、二葉ながらに芳はしく、汝幼き身なれど  
 も、父が子なるぞ母が子ぞ、などやかばかり血迷ひし、父が汝を歸せし  
 は、後を弔はんが爲ならず、腹を切りんが故ならず、君何處にも御座あ  
 れは、我が旗風に世をなびけ、君が御代にもせよとなり、自ら母に聞か  
 せしと、早やも汝は忘れけん、かくては家の名を汚し、君が御用に立た  
 むこと、思ひよるべも渚なる、此捨小舟如何にせん、正行今は禮盤の、

上よりよ、と泣き降りて、身ぞ浮草の涙川、情は深きたらしねの、教の  
 露に生ひたちし、『楠の若木ぞ芳はしき、』

○母の誠

木の葉皆、身にしむ風に誘はれて、散りて行手の山は瘦せ、軒端あらは  
 に見え渡る、草の庵に夜は更けて、『絲繰る音の幽かなり、』山の端高  
 く月冴えて、木戸の板橋霜白し、傾むく窓の燈火は、夜なく、細く輝き  
 て、紡ぐ車を照すなり、頭に戴く白雪は、瘦せたる顔に降りかゝり、老  
 いたる身には、がにの、絲とる業の苦しきも、出で、戦ふ己が子の、

中 苦勞を思へばいと輕し、

母の誠

網引する、舟の夜寒を身にしみて、

寝られぬ妻や衣うつらむ、

と漁る人を思ひやり、寝られぬ妻が寒き夜に、衣をうちて夜を明かす、  
中 これとかはれど愛情の、心は同じ母親は、我子の困苦を忍びかね、指先  
凍る冬の夜も、厭はで紡ぐ健氣さは、これも同じく國の爲め、又大君の爲  
めならむ、  
立つ霜柱踏み分けて、朝なくに母親は、鎮守の神に武運  
をば、我身に代へて祈りけり、真心こめての祈願には、神も哀れと思召  
し、いさをを立てさせ給はんは、鏡にかけて見る如し、  
紡ぎし絲を布と

なし、送りし先は大丈夫が、  
中 深傷淺傷のわかちなく、つゝむたつきとな  
りもせむ、恐れは多き事なれど、  
皇后陛下の御心に、露ほどかなふも  
のならば、  
『老の身にとりこよもなし、』  
足曳の、山の奥なる草の家  
に、  
老い巧ち果てし女さへ、  
皆それぞれの業をもて、  
中 國に盡さむ真心を、  
思へば猛き御軍の、  
前にたつべき敵なきは、  
今更謂ふも愚なり、  
『今更  
謂ふも愚なり、』

○蓬萊山

目出度やな、君が恵は久方の、  
中 光り長閑き春の日に、  
不老門を立ち出

蓬萊山

蓬萊山

で、切り『四方の景色を詠むれば、』大平峯の小松に雛鶴棲みて、中平谷の小河に  
 龜遊ぶ、君が代は、千代に八千代にさ、れ石の、巖となりて、苔のむす  
 まで命ながらへて、雨塊を破らず、風枝を鳴さじと言へば又、中平堯舜の  
 御代も斯くあらん、かほどに治まる御代なれば、千草萬木花咲き實り、五  
 穀は國に満ちて、大平上には金殿樓閣臺をならべ、中平下には民の竈賑ひ  
 て、仁義正しき御代の春、蓬萊山とはこれとかや、君が代の、千歳の松  
 も常盤色、變らぬ御代の例には、天長地久と、國も豊かに治まりて、弓  
 は袋に、切り『劍は箱に納め置く、』練鼓苔深うして、鳥もなかく、切り『驚  
 く様ぞなかりける、』

○武藏野

武藏野に、草は種々多かれど、中平摘菜にすれば扱も少なし、皆人は若き時  
 より、切り『たゞ徒らに日を送り、』大平才智藝能なき人は、中平寶の山に入りなが  
 ら、空しく歸るが如くなり、たま〜人間界に生れ來て、眞如の玉を磨  
 かずば、花人と生れし甲斐もなし、人よりは淺く思はれて、犬の老いた  
 る如くにて、中平朽果つること無念なれ、又いつの世の、いつの時にか磨く  
 らむ、頼まれぬ、世にもあるかな月鼠、そよぐ草葉の露の身なれば、大平例令  
 高位長者の身となりて、中平七珍萬寶満ちて、榮華にはこる樂みも、一

武藏野

夜の夢の如くなり、歡樂極まりて、哀情多しと、古人の文にも記さる、  
 さればにや、生々世々の樂みも、心のうちの月や花、これを樂しむ人も  
 なし、會者定離、生者必滅の世の習、春去り秋は蟬の聲、扱も果敢なき  
 命かな、世の中を、思へば夢か稻妻の、ちりとする間の語らひも、慳貪  
 愚痴は迷なり、引きよせて、結べば草の庵にて、『解ればもとの野原な  
 り』、少しさを足れりとも知れ、満ぬれば、月も程なく缺けてゆく、十  
 六夜の空や、『人の身の上と知られけり、』

○太田道灌

頃は彌生の末の方、いな、く駒に鞍置かせ、士卒引つれ道灌は、  
 野にこそは出でにける、『勇む春駒啼く雲雀、影は何處に遠近の、たつ  
 きも知らぬ原中に、士卒にはぐれ道灌は、一人さまよひ居たりけり、折  
 しも降り來る春雨に、心せかれて道灌は、駒の手綱をかひ繰りて、一と  
 鞭高く彼方なる、賤か家指して進まる、訪ふは嵐か松風か、誰まつ  
 風に琴の音ぞ、かよふ調の床しさに、駒をとめさせ道灌は、門を叩きて簑  
 一領、借らむとこそは乞ひにける、何を語らむ佐保姫の、一枝の花に物  
 いはせ、露も溢れむ山吹を、かしくも捧げつ、いとも恥らふ其様  
 に、道灌其意を悟り得ず、訝かしながら山吹を、翳して遂に歸りけり、



太田道灌

孤鞍衝雨叩茅茨

少女爲贈花一枝

少女不言花不語

英雄心緒亂如絲

城に歸りて道灌は、近侍を招ぎ問はせしに、近侍の答へ申すやう、そは古歌の意をかりて、簑なきを花によそへて答へしなりと、一首の歌を詠じけり、

七重八重、花は咲けども山吹の、

みの一つだになきを悲しき、

斯くしかぐと事のよし、具に申上げしかば、道灌いと愧らひて、いざ是れよりは山狩を、やめて詩歌を學ばんと、終に詩歌に秀でた

り、』されば人々心せよ、おのが業にと鞭うちて、學の道に勵みなば、如何なる業かならざらむ、勉め勵めよ國の爲め、』勉め勵めよ國の爲め、』

○城山

夫れ達人は大觀す、中干拔山蓋世の勇あるも、榮枯は夢か幻か、大隅山の狩坐に、眞如の月の影清く、切り『無念無想を觀ずらむ、』何々何々怒るか怒り猪の、中干俄かに激する數千騎、勇みに勇むはやり雄の、騎虎の勢ひ一轍に、留まり難きぞ是非もなき、たゞ身一つを打すて、若殿ばらに報いな

城山

む、明治十年の秋の末、諸手の軍打破れ、討つ討たれつやがて散る、  
 霜の紅葉の紅の、血汐に染めどかへりみぬ、薩摩武雄のをたけびに、打  
 散る玉は板屋打つ、霰たばしる如くにて、面を向けむ方ぞなき、こたま  
 に響く鯨波の聲、百雷一時に落るが如き有様を、隆盛打見てほ、ぞ笑  
 み、中千、わな勇ましの人々や、亥の年以來養ひし、腕の力も試し見て、心に  
 残ることもなし、いざ諸共に塵の世を、脱れ出でんは此時と、たゞ一言  
 を名残にて、桐野村田を始とし、宗徒の輩諸共に、煙と消えし大丈夫  
 の、中千、心のうちこそ勇ましけれ、

孤軍奮闘破圍還

一百里程壘壁間

我劍既折我馬斃

秋風埋骨故郷山

官軍これを望み見て、昨日迄は、陸軍大將と仰がれ、君の寵遇世の覺  
 え、類なかりし英雄も、今日は敢なく岩崎の、山下露と消え果て、移  
 ればかはる世の中の、無常を深く感じつ、「無量の思ひ胸に満ち、たゞ  
 悄然と、隊伍を整へ、中千、目と目を見合はすばかりなり、折しもあれや吹き  
 おろす、城山松の夕嵐、「岩間にむせぶ谷水の、無常の聲も何とな  
 く、悲鳴するかと聞きなされ、「戎衣の袖を濡し添ふらむ、」

○王照君

王照君

王照君

とはず語り、誰聞けとてか打詫ふる、身の憂さを知れ、山時鳥軒の草、  
 忍ぶとすれど秋更けて、切りよはり果てたる蟲とわれかな、  
 『夫れ一生の別れには、露の命も惜しからぬ、風にまかす窓の燈火、かなしみ骨髄  
 に徹りきて、形は憔悴と衰へたり、比翼連理と語りひし。妹背の契り淺  
 衣の、薄き縁となり果て、中ずわはれ果敢なき我身かな、一度君に別れて  
 は、再び相逢ふ事もなし、隔てつくせし千山萬水の、雲にあらねどよも  
 すから、心にかけて思へども、君に逢ふ夜の夢だにも見ず、今世の中に、  
 もの思ふ身は、我等ばかりと思へども、昔を傳へ聞くときは、王照君の  
 古は、漢の帝の美人にて、御寵愛は類ひなし、誠に雲の上人にて、殿上

王照君

にても並びなく、流石ゆしくおわせしが、如何なる人の讒言にや、胡國  
 といへる遠國の、夷の在所に、流され給ふぞ哀れなり、痛はしや王  
 照君は、住み慣れし花の都を、涙と共に出で給ふ、或時は船に召され、又  
 或時は、殊に險しき山を越え、餘り我身の悲しさに、馬の上にて琵琶をも  
 弾じ、古郷戀しき歌の曲、ささぐ、朗詠し給へば、風聲水音ことごとく  
 悲鳴に咽ぶ心地せり、帝も今は、御愁歎の餘りにや、辱くも龍顔に、御  
 涙を浮ばせ給ふぞありがたや、されど又綸言汗の如くにて、再び召しか  
 へさる、沙汰もなし、それは唐土これ我朝、又は胡國夷の朝、或は葉  
 屋の夜の雨、乾坤萬里と隔つれど、物思ふ身は異ならず、流れは同じ水

なれど、リリ『淵瀬と變るが如くなり、』とけんち杜鵑血に啼きて、中千何ぞ腸をたつと  
かや、しば暫し口を結で三春を、リリ『過さんにはよしなかりけり、』

石童丸

○石童丸

月に村雲花に風、心のまゝにならぬこそ、浮世にすめる習ひなれ、こゝ  
に筑前、筑後、肥前、肥後、大隅薩摩の守護職に、中千加藤重氏其人は無情を  
感じ世を捨て、リリ『諸國修業に出で給ふ、』大千あつとに残りし妻や子は、中千思  
ひ待つこと十四年、父上高野にありと聞き、石童丸は母上と、菅の小笠を  
傾けて、旅の勞れも厭ひなく、やうやく高野の禿宿、宿り給ひて二人共、

中千明日は逢はんと悦ぶも、女人禁制の山なれば、せむかたなくも母上  
を、麓に残し参らせて、石童丸はたゞ獨り、心細道分けながら、峰の薬師  
や瀧不動、手を合せつゝ、伏し拜み、さびしさいはむかたなくも、其夜は  
そこに假寝して、中千笠の屏風に腕枕、諸行無常と告げ渡る、鐘の音いと  
身にしみて、大千九百九十の寺々や、中千峰谷々の阿彌陀佛、菩薩を念じ尋ねれ  
ど、父ぞと思ふ人はなく、三日二夜は早や過ぎぬ、麓の母を案ずれば、う  
しろに引かるゝ心地して、松吹く風の音までも、母の聲かと疑はれ、

ほろくくと、鳴く山鳥の聲さけば、

父かと思ふ母かと思ふ、

石童丸

と行基菩薩の詠まれたる、歌の心も思はれて、歩むともなく歩みつゝ、  
 無名の橋を越え来れば、左に花を右に珠數、光明眞言唱へつゝ、刈萱道  
 心下り坂、見上げ見下るす顔と顔、石童丸の振袖と、高祖の袖ともつれ  
 わひ、はなれがたく見えけるは、深き縁のあるならむ、其時袖に縋りつ  
 き、あな御僧よ御山の、今道心をこの我に、教へてたべと請ふさまの、  
 哀れに見ゆる幼子が、腰にさしたる脇差は、見覚えのある品のみか、花  
 の顔せ月の眉、いづこか母に似てあれば、いかにも不思議に堪へねども、  
 じつところへて謂へるやう、尋ぬる人の名をかきて、札場にたつれば逢  
 ふことも、あらむと聞きし石童が、途方にくれしありさまを、哀れと思

ひ手をとりにて、おのが住家に連れ歸り、國は何所名は何と、問はせ給へ  
 ば涙ぐみ、中千國は筑紫の松浦瀉、加藤左衛門重氏が、忘れ形見の石童と、  
 聞くより刈萱胸せまり、落つる涙をといめ得ず、石童それと悟りけむ、  
 若し父上にましまさば、中千あかしてたべと前により、うしろにまはり刈萱  
 の、顔のぞきこみ懇ろに、請はる、時の石童を、あ、なつかしき我子よ  
 と、謂はんとせしが名乗りかね、其刈萱は去年の秋、空しくなりぬと宣  
 へば、石童わつと泣伏して、生くる人とも見えざるを、刈萱千々に慰め  
 て、墓場に連れゆき指をさし、これこそ父の墓なれと、教へ給へば石童  
 は、力なく一跪き、涙にぬれし袖袂、中千しぼりもあへず香を焚き、雪よ

り白き手を合せ、南無阿彌陀佛と伏し拜む、姿を見つる刈萱は、胸もは  
り裂くばかりなり、十年に餘る修行にて、生者必滅會者定離、本來空の  
道理を、悟りながらも恩愛の、情には脆きものなるか、墓場に倒れし石  
童を、抱き起して徐るに、涙は佛の爲めならず、一度下りて母上に、此  
事謂うて回向せよと、諭されければ石童は、泣くく山を下りつゝ、母  
に告げんと来て見れば、哀れなるかな母上は、石童丸を待ち兼ねて、麓の  
野邊に枯残る、草葉の露と消え給ふ、嗚呼父上に生別れ、又母上に  
死別れ、天にも地にもたゞ獨り、便りとするは姉ばかり、逢うて此事語ら  
むと、歸りて見れば姉もまた、此世を去りて影もなし、さてもつれなき

浮世かな、更けゆく夜半に霜さえて、磯山松は音もなく、千鳥しばなく  
松浦瀉、浪に漂ふ拾小舟、引く人もなき石童は、高野に登りし其時に、  
憐み給ひし御僧の、中平外に便るはなしと知り、再び高野に刈萱の、庵尋ね  
て御弟子にと、請はれて刈萱是非もなく、共に連れ立ち國々を、修業な  
しつゝ、信濃なる、國に住所を定めさせ、師弟と名乗るばかりにて、親子  
地藏と稱へよと、切り「遺言し給ふ哀れさよ、」信濃に名高き善光寺、石童  
寺の本尊に、親子地藏のおはすなり、親子の縁はかくまで、中平切ても切  
ぬものなるぞ、今は昔の物語、南無や大悲の地藏尊、切り「南無や大悲の  
地藏尊、」

○河中島

河中島

天文二十三年、中秋の半の頃かよ、上杉謙信は、八千餘騎を従がへて、  
 『河中島に打て出づ』、我れ此度の戦は、武田信玄を追つめて、親しく  
 雌雄を決せむと、渦巻さかへす犀川を、渡りて陣をぞ取りにける、信玄  
 は、此事を聞くより早く、二萬餘騎にてうち向ひ、砦をかためて戦はず、  
 謙信は氣をいらち、村上義清に謂ひ含め、月影暗き山々の、草葉の露を分  
 けさせて、彼方此方に兵を伏せ、樵夫に擬せし兵を、出して甲斐の兵  
 營に、近づかしむれば甲斐の兵、謀とは露知らず、朝霧の間に追ひまく

る、待ち設けたる伏兵は、時こそ來れと勝鯨波を、どつと擧げつゝ、引包  
 み、袋に物を取る如く、一騎も残さず打取たり、信玄怒て軍勢を、雲霞  
 の如くに繰り出せば、謙信も備をたて、打向ふ、龍躍て雲を起し、虎嘯  
 て風を呼ぶ、勢破竹の如くにて、入亂れ入亂れ攻め戦ふ有様は、颯風砂  
 をまき、百雷岩をぬくに異ならず、越後の勢退けば、甲斐の軍これを追ひ、  
 甲斐の軍退けば、越後の勢これを追ふ、兵を合すること十七度、い  
 づれを勝としらまみゆ、ひくかと思えし信玄が、一と手の勢の旗を伏せ、  
 河を渡りてよしあしの、ひまをひそかに忍ばせて、勇立たる謙信の、麾  
 本近く進みより、面も振らず切て入る、麾本の軍勢は、思はぬ兵に敗ら

河中島

走るあしより甲斐の兵、鯨波をつくつて追つかくる、宇佐見定行  
 これを見て、猛虎の如くに憤り、憤馬を駈て大音に、我が手の勢に下知  
 をなし、敵の横合より、無二無三に突入て、淵瀬もいはず追落す、信  
 玄度を失ひて、流れを亂して走るところを、謙信たゞ一騎、赤栗毛の逞し  
 きに鞭をあて、大平豎子じゆしいづく迄逃るぞと、謂ひも果さず切りつくる、中平信  
 玄は刀を抜くに暇なく、軍配扇にて受けたれど、扇は二つに折られたり、  
 降るとみて、傘かさとる暇ひまもなかりけり、

河中島の夕立の雨

と謠うたひし如く二の太刀は、中平早や肩先に切り込みぬ、あつと謂いふ間に信玄

の、命は岩にくだかる、泡と消えなむ危あやうきを、救はむとして軍兵が、  
 心はやたけに勇めども、中平水はやくして近よれず、大將原大隅、鎧やりをのば  
 して謙信を、中平突きはしたれどあだ突きし、かくてはなれどと鎧やりをあげ、  
 たゞ一と打にと打たりしに、馬にあたりて馬逸す、謙信は駒をしづめむ  
 と、手綱たづなかいぐる其ひまに、信玄は、虎口を遁れ去りにけり、

鞭聲むちせう肅々夜渡河  
 遺恨十年磨一劍  
 曉見千兵擁大牙  
 流星光底逸長蛇

かく信玄を、打ちもらしたる謙信が、心の中はいかならむ、切り『思ひや  
 るだに哀れなり、』信玄は、肩の痛手に堪へかねて、其夜の中に軍勢を、



まゝとめて出る月影に、道を求めてはるくくと、我が故郷に歸りけり、  
我が故郷に歸りけり、

小督

○小督

頃しも秋の半の空、詠めがちなる御袖の、涙の露を拂はせ給ひ、宿直に  
待ふ彈正の大弼仲國を召され、如何に仲國、小督の行衛を知りたるか、  
内裏を逃れ出でしより、嗟蛾のわたりに聊の、知己たよりて在りと聞  
く、汝如何にもして尋出で、此文傳へよとの仰なり、仲國つくづく  
思ふよう、嗟蛾のわたりとばかりにて、主の名をだに知らざれば、尋ね

むやうはなけれども、小督の殿は世に知られたる、琴の上手におはすれ  
ば、こよひ最中の月かげに、君の御上おぼし出で、一曲をだに調べ給は  
ぬことはよもあらじ、兎にも角にも尋ね出で参らせて、叡慮を休め奉らむ  
と、心に思ひ定めつ、畏りぬと聞え上げ、やがて御前を罷出で、寮の御馬  
に打乗りて、隈なき月に鞭をあげ、小鹿鳴く此山里と詠じけむ、嗟  
峨野の奥にわけいれば、さくらめき渡る白露に、尾花が袖も打しめり、鳴  
きかはしたる蟲の音に、浮世の善悪も思はれて、獨り心を痛めつ、家  
ある毎に立ちよりて、花問へど知るもの更になし、如何はせんと駒を立て、  
茫然としてありつるが、若し寶林寺にやおはすらむと、龜山近く到りし

小督

に、大平しづが遙に聞えたり、中峰の嵐か松風か、尋ぬる君の琴の音か、と  
 めつ、行けば一と村の、松の影なる片折戸、内に聞ゆる爪音を、手綱ゆ  
 るべてつくぐと、聞けば誠や月花の、御遊のむしろに侍りて、笛の役  
 つかふまつりし時、聞おぼえつる調べにて、中干、殊更曲は想夫戀、さてはま  
 ぎれもあらじとて、腰より笏窈ぬき出で、少しばかり吹きならし、や  
 がて駒より飛下りて、中干、門をほとくと叫き、これは仲國內裏より、御使  
 に参りたり、開けさせ給へ、開けさせ給へと訪ふに、琴弾きさし、静ま  
 りかへりて音もなし、や、ありて、いたいげしたる小女房、門を細目に  
 あけながら、顔ばかり差出して、あやしの賤が伏せ庵に、内裏より御使

など、給はるべきにあらず、門違ひにや侍らむといふに、仲國なまじひ  
 にいらへしては、門さ、れむと思ひければ、是非なく押しあけて内に入  
 り、妻戸の縁に進みより、中干、何とてか、る所には御わたり侍ふぞ、君には  
 明け暮れおぼし沈ませ給ひ、つや、く供御も聞し召さず、打ちとけ御寢  
 もならせ給はず、ほとく御命さへ、覺束なふこそ見え給へり、かく申  
 さば、うはの空にやおぼすらんと、御消息を参らすれば、  
 かの雲井やと、御文顔にあて給ひ、しばし言葉も涙の雨に、晴れたる  
 月も曇るらむ、仲國もそるるに、せき来る涙をおさへ、とかく慰め参ら  
 せつ、表の衣絞るばかりになりけり、や、ありて、御かへりごと引

辨内侍

き結び、女房の装束一と重、賜はりければ肩にかけ、君にもさこそ、待  
 ちわびておはすりめ、重ねて御迎には参るべし、待たせ給へといひすて  
 て、切り『駒を早めて立歸り、』ありし次第を残りなく、申奏する程にはの  
 ぼのと、秋の長夜も明けにけり、切り『秋の長夜も明けにけり、』

○辨内侍

哀れや落花情あるを、流水などか情なけむ、況や中も吉野川、申はれて世  
 に住む妹山や、春山の峰の月としも、しばしらぎよふ程もなく、あかぬ  
 別れの村時雨、切り『曇りやすきぞ是非もなき』、大に河内守左衛門尉楠

辨内侍

正行は、申天下の安危を身一つに、思ひあつめて美よし野や、吉野の宮に  
 召され行く、頃は正平二年、師走の末の冬の空、嵐にさほふ木の葉に  
 も、霰たばしる玉笹の、消えを争ふ、一族郎黨引具して、急ぎぞ來つる  
 石川や、何に騒ぐらん群千鳥、申鳴音亂る、彼方より、俄かに響く人馬の  
 矢叫び、敵か味方か伏勢か、風に嘶く駒とめて、山下道を見渡せば、電  
 光石火切り結び、落花狼藉なき叫ぶ、乙女の聲のたまぎるは、必定曲者  
 出でたりな、切りいでや弱さを助けやり、強さをくじきくれんずと、馬上  
 の正行眞つ先に、刃をかざして切て入る、前より切りつ後より、突き貫き  
 つ無二無三、當るを拂ひ逃るを追ひ、縦横無盡に確立し、掣電飛雷の早

辨内侍

業の、其勢はさながらに、阿修羅王の荒れたるが如く、獸王獅子の狂へるに似たり、野分の中の女郎花、思はぬ人に救はれて、思ふ人とはなりにける、其正行に守護されて、吉野の宮に歸りゆく、辨内侍の綾の袖、濡るゝは露か露ならず、悲喜交々の涙なり、侍臣帝に奏すらく、逆賊高師直兼てしも、おもひを懸けし辨内侍を、奪ひとらん企みして、既に石川の邊にて、軍卒あまた取りかこみ、虎口危く見えけるを、ゆくりなくも正行が、危難を救ひまゐらせて、事なく歸館せられけり、傳奏かくと聞き召し、帝は御簾をかゝげさせ、汝正行なかりせば、いとも口惜しからましを、よくこそ助け計ひつれとて、内侍を正行に賜はむと、詔して

くだされぬ、何思ひけん正行は、綸言いともかしてみて、

とても世に、ながらふべくもあらぬ身の、

假の契を如何で結ばむ、

と奏してこそは辭しにける、嗚呼あぢきなの世の中や、身はこれ右小辨俊基が、忘れがたみの姫小松、花の匂ひはなけれども、操の色は深みどり、結び給ひし妹と脊の、縁の絲の長かれと、祈りし甲斐も水の泡、消なば消えぬの心かや、時雨につよき松さへも、清き雪には色かふる、習ひもあるに君はそも、たゞ假初の契よと、言ひ捨てまし、御心の、そこには深きゆゑあらん、問はぬもつらし問ふはまた、いと恥かしとや

辨内侍

辨内侍

しなん、かくやとばかりとつをいつ、辨内侍は心から、戀路の暗にふみ  
 まよひ、今一度の逢瀬をと、跡を慕ひて行きみしに、申こはそも如何に正  
 行を初め、百四十三人の一族郎黨は、か、れとしてしもなでざりし、其黒  
 髪を切りすて、如意輪堂に奉納し、さて正行が歟もて、堂の扉にとめ  
 たりし、辭世のあとを讀みれば、

かへらじと、兼ておもへば梓弓、

なき數に入る名をぞとゞむる、

扱は我夫正行君、かゝる覺悟のましくて、假の契を結ばじと、さとし  
 まし、かそれとしも、淺澤水のいとあさき、女心の悟りかね、つれな

辨内侍

き君と葛の葉の、群恨みし事の恥かしゃ、この山寺の法の風、今の迷ひを  
 吹きかへて、死なば未來は彼の國の、一つ蓮の花の上、大千各留半座乘華  
 臺、待我閻浮同行人、短かさ假の契をば、長さ誠の契とも、結びかへた  
 る嬉しさよ、帝の御爲君の爲に、我が身もかくや返しせん、

大君に、つかへまつるも今日よりは、

心にそむる墨染の袖、

誠あらば心なき、空ゆく雲もたゞよはん、況や正行木石にあらず、今や  
 決死の出陣に、契らぬ妻の真心を、身につまされて流石にも、断腸  
 の思ひやるせなく、不憫の者よ健氣なる、我妻なれとそゝるにも、鎧

の袖を濡しけり、リリ『鑑の袖を濡しけり、』

錦の御旗

○錦の御旗

天照す、日の影うつる、中干真名井の流れ末清き、みつほ瑞穂の國は昔より、リリ武  
勇忠義の人多し、大干元弘年中の事かとおよ、中干後醍醐帝の三の皇子、大塔の  
宮と聞えしは、出家の身にてましませど、父の御爲め國の爲め、義兵を舉  
げて逆賊を、征伐せむとの御企、早くも賊に洩れしかば、四方の備さび  
しくて、比叡の奥にも南都にも、身を置き給ふこと難く、中干熊野を指し  
て落ち給ふ、股肱の臣は誰々ぞ、あかまつりつし赤松律師、くわうりんぼう光林坊、きでら木寺の相模、みかはらう三河坊、

片岡八郎、武藏坊、平賀の三郎、矢田彦七、村上義光の九人にて、柿の衣に  
笈を負ひ、頭巾眉深く被りて、先達つくりて山伏の、中干熊野詣でに装ひ  
たり、しやうり龍樓鳳闕に人となり、かやま輕軒香車を出でまされぬ、うんじん雲上人の御歩  
行の、ちゆうじん長途如何にと御供の、人々危く思ひしに、たがひ社々の御祈、しゆく宿りく  
の御勤、あせ露も怠り給はねば、あせ勤修を積める山伏も、あせ見答むるもの更にな  
し、ゆら由良の港を見渡せば、おきこ沖漕ぐ舟の楫をたへ、うら浦の濱木綿幾重とも、  
中干知らぬ浪路になく千鳥、きぢ紀路の遠山渺々と、うすむらさき薄紫の藤代の、まつ松にか  
れる磯の浪、わか和歌吹上の浦かけて、つき月に磨ける玉津島、ひかり光をよそに伏し  
拜み、ちやうていきよくほ長汀曲浦の旅の路、こころくだ心を碎く習ひなり、あめ雨を含める孤村の樹、ゆふべ夕

錦の御旗

錦の御旗

を送る遠寺の鐘、哀を催す黄昏に、切目の王子に着き給ひ、叢祠に袖をかたしきて、中干朝家の榮えを祈ります、かくて十津川の戸野兵衛、竹原八郎たよりて暫し居給へど、こゝにもながくあり兼て、中干高野の方へと落ち給ふ、茲に妹加瀬莊司として、中干賊に一味の士の宮をさへて申すやう、此道通し申しなば、鎌倉より罪せられむ、さは謂へ宮に弓ひくは、如何にも恐れ多ければ、錦の御旗賜はるか、さなくば一人の御供を、といめて證據にせむと謂ふ、股肱の臣を一人だに、いかで残し給ふべき、詮方なくも御旗をば、彼れに與へて虎の口、中干僅かにのがれ給ひけり、かゝる所に村上彦四郎義光は、草鞋の緒や切れにけむ、遙に後れたりしかば、

錦の御旗

宮に追ひつゝ申さんと、中干足疾く過ぐる折しもあれ、莊司にはたと行きあへり、下僕が持てる旗見れば、中干正しく錦の御旗なり、不思議に思ひ尋ねれば、事しかぐと答ふるに、村上これを聞きも敢へず、中干赫と怒りて打睨み、こはそも如何に何事ぞ、忝くも畏くも、四海の主に御在ます、天子の御子朝敵を、追討あらむ其爲めに、御門出の道なるに、汝等如き下郎輩、かゝる振舞すべきかと、中干持たる御旗奪ひとり、中干大の男を搔搔み、四五丈ばかり投げたるは、獅子の荒れしに異ならず、此怪力に恐れけむ、妹加瀬莊司、一言も半句もなくてすくみけり、義光御旗を肩にかけ、程なく宮に追付きて、御前にひれ伏し事の由、具さに申上げしか

ば、宮は喜び給ひ古の、北宮勳が勇氣にも切り立まされりと賞でましぬ』  
 勇のみならず義光は、吉野の奥の戦に、宮に代りて討死し、御旗に打た  
 る日月と、光争ふ忠臣と、義士とたゞへて萬代も、君に代ふる人臣の、  
 鏡とこそは仰がるれ『鏡とこそは仰がるれ』

○溇陽江

紅葉うつろひあしが散る、秋の哀れもいと深き、『溇陽江の夕まぐれ、』  
 友の船出を送り来て、別れを惜む盃の、數重なれど絲竹の、調べもそ  
 はぬ淋しさに、本意なきこと、思ひつゝ、彭遠白き波の上の、月打守る

折しもあれ、たちまち聞ゆる琵琶の聲、思ひもかけぬことなれば、互に  
 心どきめきて、歸らむことも行くことも、忘れ果てつゝ、其聲を、たづね  
 て誰ぞとおとなへば、打ひそまりて答へなし、船漕ぎよせて酒を添へ、燈  
 火かゝげ又更に、宴の筵打ひらき、琵琶の主を招けども、頓には出で  
 來ず百千度、呼出てられてしぶくゝに、此方の船に移り來ぬ、琵琶を抱  
 きてまばゆげに、面を掩ひ弾初めし、其撥音に謂ひ知らぬ、深き情の籠  
 りつゝ、弾きゆくまゝに常々の、己が心のうれたさを、訴へ出づる心地  
 せり、人こそ知らぬ濱木綿の、百重かさなるうき思ひ、積る怨の數々を、  
 四筋の絲にいはすらむ、軽く打ち寛くひねり、拂ひつかゝげつ初には、



霓裳を奏で、後には六么を弾じけり、

大絃嘈々如急雨

小絃切々如私語

嘈々切々錯雜彈

大珠小珠落玉盤

間關鶯語花底滑

幽咽泉流水下灘

水泉冷澁の趣、凝て絲をたへ、しばし聲なき其程は、そゞろにうれひを催して、聲あるよりもなかくに、風情を添へし折しもあれ、大乎忽ち響く撥の音、中干銀瓶くだけて水迸り、軍起りて打物の、しのぎを削るにさも似たり、曲もいまはとなりし時、撥を收めて四つの緒を、たゞ一せいにかきなせば、中干さながら帛を裂く如し、東の船も西なるも、たゞ悄然と聞き

はれて、もの謂ふ人もあらばこそ、秋の浦風身にしみて、水底白く澄みわたる、中干月の影こそ更けにけり、衣をつくるひ居なをりて、語る言葉も口籠りて、中干妾も元は都なる、蝦蟇の陵下の生れにて、十三歳の頃よりも、琵琶の上手と世に知られ、玉を飾れる宮の内、黄金を敷ける臺にも、召上げられてみやびをの、彼方此方の會にも、招きよせられ戯れあひ、さざめきかはし綾錦、かづき歸れば家も富み、身も榮えつゝ世の中は、かくあるものと愚にも、思ひ頼みて花の春、紅葉の秋と等閑に、日を経る程に同胞に、親族に離れ夕去き、朝來りて顔花の、中干盛りもいつか過ぎの門、馬も車も寄せ來ねば、世渡る方便盡き果て、身を浮草の根をば

絶え、水のまに／＼さそはれて、情も淺き商人を、夫とするだに悲し  
 みを、其夫遠く旅立し、此浦船に夜を守る、月明らかに水寒み、更けゆく  
 儘にまどろめば、我が身の盛り夢に見て、いと悲しさ増りぬと、語  
 を聞て思はずも、太き溜息つく／＼と、琵琶を聞くだに悲しきを、此物  
 語の哀れさよ、大干始めて逢へる此人と、中身の際こそは變れども、我も同  
 じく浮沈み、去年より此處にさすりひて、中干溇陽城の片ほとり、蘆と竹と  
 の生茂る、いふせき中に家居して、朝夕に聞くものは、高嶺の猿ほと  
 とぎす、樵夫の歌や揚卷が、吹きなす笛の音ばかり、却て胸を痛めつ、  
 なやみいや増す心地して、昔聞さつる絲竹の、音なつかしく思ひしに、

今宵の君が琵琶の聲、天津乙女の音楽を、聞く心地していと嬉し、辭む  
 ことなく今一ツ、弾ひて聞かせよ我れも又、歌を作りて贈らむと、謂へ  
 ば實にもと思ひけむ、又も弾ずる撥音は、切り『前の聲よりいそがしく、』  
 もの凄ければ江州の、司馬は更なり並み居たる、切り『人も袖をぞしぼり  
 ける、』

○兵六夢物語

眼疾ある者は、必ず三體の月を拜み、心臆する者は、必ず鬼畜の妖怪に  
 襲はる、茄子を踏で蝦蟇と驚き、繩の横たはるを見て、蛇の蟠まるかと

膽玉を消すは、皆これ、己の氣さはがしうして、本然の心氣、切り「修ま  
 らざるが故なり、」大下「されば心氣修まらざる時は、中下何國に行くとして  
 も、然も化物どもに惱まされざるはなし、本心專一にして、精神魂膽缺  
 くることなけば、何れの所よりか邪氣を引き、妖怪の目寄を生ぜんや、  
 兵六が如きは、心氣本より修まらざるが故、兎角三ツ目錢目の猿彌陀が、  
 危きを脱れ、ふるへ怖れて行く所、世の中は、中下道こそなけれ魔蟲原、  
 山の奥にも化物ばかり、何と菖蒲の谷蔭や、目口もよめぬ面つきの、無  
 面相の小坊主たゞ獨り、赤裸にて兵六が、歩むに添うてつき来る、兵六  
 急げば己れも急ぎ、止まれば己れも止まり、走るときは己れも走り、静

かに行けば小坊主も、静かに歩み跟きくること、中下恰も影の形に従ふが  
 如し、兵六慄とおぞけたち、聲をあららげ謂ふやうは、中下やれ己れ何物  
 の小忤ぞ、何の用事あつて、我が道行くあとに跟きくるぞ、小坊主が曰  
 く、我こそは、鞍馬天狗の落し子にて、中下闇間小坊主と謂ふものなり、  
 此ごろ巢立の雛子なれど、自然に備はる自慢の力、中下相撲は實に梅ヶ谷  
 から習うたぞ、いで試に勝負くと、力足踏んで飛びかゝれば、己れ似  
 合はぬ小作物、首に刀は引出物、たゞ一討と侮りて、二ツになれと切り  
 付くれば、ひらりとくゞる妻手の下、突かんとすれば弓手の脇へ飛び逃  
 る、これは仕たりと岩の角、松の飛び根は如何程も、中下切りたゞらかせ

ど甲斐もなし、その自在なる事電光の閃くが如し、又熊坂の長範が、物見の松の戦に似たり、兵六今は刀を投げすて、大手を廣げて捕へんとすれば、小坊主早くも俯き、曲り尻を鋒立て、紫尻紅を引張つて、ふんと一聲合圖すれば、伏勢一度にどつと起り、しばし茲に松の下、藪の内より土手の上、黒い小坊主赤坊主、白い小坊主黄い小坊主、其中に山吹色の口無し坊主、目無し坊主鼻缺け坊主を先きとして、七重八重、九重迄もと取り圍み、己が同士を寄せ太鼓、手拍子打てたぐりかかるに、兵六叫び謂ふやうは、今日は如何なる黄昏ぞ、宥してくれや坊主共、堪忍せよと働けど、皆毒色の鮭坊主、吸付き舞付きかぢりつ

〇、中手こゝは五月の菖蒲谷、ふつと離れはせぬわいなと、手足を獲らへ引く網の、漏れ出づ可きやうは更になし、兵六あつと心付き、兼ねて習ひし光明眞言、此時なりと早速に、邪神の名號唱へかくなれば、實にも梵呪の靈験にや、闇間小坊主さんぐに、茸に鹽のしをたれて、中手程なく消えてぞ失せにける、これは不思議と見廻せば、始めて知し早松茸、時知り顔に生ひ出でたるを、中手頭残らず踏み折られ、道の行く手に倒れしを、切り『惜まぬ人こそなかりける、』故なき迷ひの目寄より、ひとへに八百屋の事缺きと、後にぞ思ひ知られける、切り『後にぞ思ひ知られける、』

○奇縁

奇縁

良禽は樹を選んで棲み、良臣は主を擇んで仕ふとかや、茲に故左馬頭源義朝の末子、牛若丸と呼ばるは、父の義朝討れし後、母諸共に生捕られ、末だ黑白も分かぬ身の、出家になれとて行先も、鞍馬寺にぞ送られける、大月日に關のなくくも、明し暮して人となり、思へば無念やる方なく、平家を打て父の仇、報はでなどか止みなんと、獨り心を痛めつ、うき節繁き吳竹の、夜なく寺を忍び出で、月清水の觀音へ、今宵も歩を運ばせて、心願成就させ給へと、心を籠めてぞ祈

らる、大平切て又西塔の武藏坊辨慶は、獨りつくく思ふやう、かゝる亂れし世に生れ、墨の衣を身に纏ひ、香花を取りて佛前に、あたら此世を此まゝに、朽ち果つる身のあるべきぞ、よしや不動の利劍を振り、人を切るとも殺すとも、爪繰る珠數の紐されて、亂れむ此世を鎮むべき、功だに立たば中々に、衆生濟度の道ならむ、いでや心のまゝに振舞て、後世に名をも揚ぐべしと、既に不敵の心を起し、夜なく洛中を徘徊して、往來の人を刎し、太刀刀を奪ひ取り、人の剛臆ためしみるに、手に立つものゝあらざれば、愈々我慢増長し、今宵も清水の觀音へ來て、群がる人を覗きしに、年の比十四五ばかりの公達が、讀經なしつゝ、

奇縁

在おほするを、牛若丸うしかまるとは露知つゆしらず、近ちかく差寄さしより窺うかがふに、容顔ようがん誠まことに麗うるはしく、  
 唯人たひひととしては見えざるが、つくづく見れば紛まぎれなく、先夜せんや出會であうて不覺ふかくを  
 取とり、無念むねんの殘のこる其小性そのこしやう、中ちゆう能にき所ところにて出會であふたり、思おもひ知しらせむと悦よろこ  
 びて、牛若丸うしかまるの歸かへり途みち、窺うかがひてこそは居ゐたりけれ、機敏きびん達智たつちの牛若うしかは、  
 早はやくもそれと見留みとめても、そしらぬ様さまにて經きやうを畢おへ、悠々ゆうゆう寺内じないを立出たち出い  
 て、五條ごじやうの橋はしにさしかゝる、中ちゆう比ひしも秋あきの半なの空そら、更さらる川風かわかぜ身みにしみ  
 て、月つきすみ渡る橋はしの上うへ、行いくとはなしに歩あみつゝ、往いかふ人も影かげ絶たえて、  
 心こころすぢげに誰たれ聞きけと、腰こしより窺うかが取とり出いで、吹ふきすすみつゝ、渡わたり行いく、  
 待まちまうけたる辨慶べんけいは、黑革くろかわ威いの大鏡おほやまひ、草摺くさすり長ながに着きなしつゝ、中ちゆう例れいの薙刀たぎ杖じやう

と突つき、牛若丸うしかまるの行先いりさきに、立たふさがりて謂いひけるは、如何いかなる人ひとぞ夜  
 更さらけて獨ひとりり、見みればよき太刀たがひ佩ひれたり、我われに與あへて罷たられよ、さなく  
 ば通とほり得えさせじと、幸あきはつたと曠あひらで立たたりける、中ちゆう牛若うしか聞きてあざ笑わらひ、ほ  
 しくば此こゝ太刀たがひ取とりて見みよ、むざと獲とるものかほと、謂いはせもあへず辨  
 慶べんけいは、薙刀たぎ取とりて引ひくばめ、中ちゆう惡わるき小性こしやうの謂いひ條じやうかな、さらばかくぞと  
 切きてかゝる、牛若うしか慮おぼする氣色きしきなく、静しづかに薄衣うすぎ引ひのけて、太刀たがひ拔ひきかざ  
 し渡わたり合あひ、暫しばし戦いくさひ攻せめ合あひしが、たゞみ重ねて打うつ太刀たがひに、さしも  
 の辨慶べんけいあしらひ兼かね、橋桁はしげ二三間にさんかん飛とびしざり、いたく肝かんをぞ消けしたりけ  
 る、されど甲斐かうなき少年せうねんに、何程いかばかりのことのあるべきぞと、更さらに勇氣ゆうきを勵む

まして、薙刀柄長に追取伸べ、走り掛て薙ぎ拂へば、左にはづし右にさ  
 け、裙を拂へばをどり越え、頭を薙げばついくり、前にあらはれ後に  
 せまり、さながら花にたはる、蝴蝶の如く、空に飛びかふ燕に似たり、  
 辨慶秘術を盡せども、姿もさだかに認め得ず、次第に氣力も勞れ來て、  
 たゆむすき間に辨慶は、薙刀もろくも打落され、幸茫然としてぞ立たり  
 ける、中不思議や御身は如何なれば、かほどけなげに在するぞ、委しく  
 名乗らせましませと、辭を改め謂ひければ、我れは源の牛若なり、汝は  
 誰ぞと問ひ給ふ、さては義朝の御子にて在するか、我れは西塔の武藏坊  
 辨慶なり、粗忽の段はゆるされよ、これより主君と頼まむと、こゝに主

奇縁

從の約を結び、薄衣被がせ奉り、牛若丸に従ひて、切り『九條の御所へぞ  
 参りける、』かくて平家を亡ぼして、共に譽れの高き名は、中永く月日  
 と輝きて、蝦夷が千島の果て迄も、切り『知らぬ人こそなかりけれ、』

○國の御柱

湊川 流れの水のいと清く、中名も橘の花の香は、八千代はおるか萬代  
 の、切り『末の末までかほるらむ』、大赤坂山の秋の暮、中其真心の紅は、  
 紅葉の色に輝きて、三度寄せくる人波を、太刀風強く打拂ひ、彼方の空  
 は雲晴れて、月すみよしや天王寺、鐘の響はそれとなく、中諸行無常と

國の御柱

告げ渡る、川は寄手の三途川、おのれとおぼれ沈みゆく、中千千早の城に  
 さきがけて、かつ色見せよ山櫻、嵐や花のかたぎなるらむと、二人のし  
 れもの詠みたるは、我が身の上としらま弓。引れて藁の人形に、たぶら  
 かされて二つなき、命を落すやからこそ、中千哀れと謂ふもおろかなれ、  
大金剛山の巍峨として、中千雲の上まで聳えしは、動かぬ君が心にて、寄  
 手を押へ其罪を、糺の前ゆ押出し、出雲路かけて火を放ち、僧都僧都を語  
 らひ泣しめて、あらぬ屍を尋ねなせ、四條何原による波の、よりく人  
 を欺くも、心は清き櫻井の、驛に於ていとほしき、蕾の花に別れしも、  
 皆大君のためぞかし、筑紫筑紫の山のほとゝぎす、友呼友呼集め九重の、雲井雲井の

空を心ざし、山千飛びとするを射留めむと、弓に矢番ひ見渡せば、須磨の  
 上野と鹿松の、岡にどよめき叫びあふ、聲は猿か小男鹿か、のがさじも  
 のと遠近に、群り集ふけものらを、中千火串にあらぬ鎗先に、さしてゆく  
 てをつくぐと、思ひまはせば此後は、山千山まとゝぎす山を出で、たれ憚  
 らず啼渡る、中千世とやならむと末かけて、さとする武夫は今こゝに、死し  
 て七度生れ来て、鳥や獸を狩りつくし、大御心大御心を安めむと、親族親族集へて  
 湊川 あはれ果敢なさうたかたの、中千水の水の泡とぞ消えにける、

豹死留皮豈偶然  
 湊川遺蹟水連天  
 人生有限名無盡  
 楠子誠忠萬古傳



嗚呼これ橋の花の香の、世々につさせぬしにて、なき跡までも諸人の、袖にかほりは残りけり、嗚呼これ橋の花の香の、世々につさせぬしにて、なき跡までも諸人の、袖にかほりは残りけり、袖にかほりは残りけり、袖にかほりは残りけり、

○毒饅頭

笑へば子女も懐かしめ、怒れば虎も恐れしむ、英邁偉絶の家傑も、  
『まかせぬものは涙なり、』大干ここに加藤肥後守清正は、知遇の恩に  
身を捨て、四百餘州を我が駒の、蹄に蹴んと勇みしも、さめて果敢な

き夢なれや、哀れ太閤世を去りて、世嗣の君は幼なし、石田小西の小人等、必ず事をあやまたむ、一度は死する此からだ、捨て果斐ある時や  
来む、されど、仁義の深き家康に、心の弓も引き、さりとして幼君も捨てられず、心二つに身は一つ、流石鬼神の清正も、困じ果て、ぞ  
居たりける、これより先に京都なる、二條の城に幼君が、成らせられた  
るその時に、御供なせし清正に、豊國神社の御供物と、謂うてもてな  
す毒饅頭、毒とは知れど家康の、股肱の臣の澁川は、それとは知らで己  
れ先づ、毒見をなしてす、めける、其真心をいなみかね、一つを取りて  
味はへば、身体は日々に衰弱し、とても餘命は永からじ、命あるうち今

一度、最後の御目見得たまはりて、歸國の御暇願はむと、片桐市之丞且元と、中平共に出仕をなしにける、此時幼君の秀頼公は、今年漸く御七歳、淀君附添ひ出でまして、太閤殿の果敢なくも、御他界ありし其後は、頼きつたる御身まで、歸國をなすは家康の、威に恐れてのことなるか、但し又、外に望のありてかと、中平恨をふくむ一言に、清正伏して申す、朝鮮までも武名をば、轟かしたるなれの果て、いかでか恐れ申すべし、且つ又、外に望のなき身體、家康公と申し奉るは、仁義に留める御大將、無道の事はなされまじ、千に一つもなされなば、中平大阪城の鐵壁に、劣らぬ程の且元あり、老いはしつれどこの清正、他事に見過し申さ

んや、第一番に駆せつけて、敵を蹄にかけちらし、御心休め申さんと、いと頼もしき言上に、中平歸國の願許されぬ、大平烈帛一聲不如歸と叫ぶ、中平山ほととぎす血に鳴くも、我が身の上と清正は、心に思ひあきらめて、秀頼公に打向ひ、この清正の亡き後は、たゞ且元の諫言を、心寛くも容れられて、徳川殿を父君と、思ひ給ひて關東に、必ず弓を引かせ給ふなと、いと懇ろに申上ぐれば、中平「秀頼公は聞し召し、爺の言葉は守れども、病の爲めに歸國せば、最早こゝへは參らぬか、病つのならば自らが、看護をなしてつかはさん、國に待つものあるならば、そは呼びよせよと仰せける、鬼神をあざむく清正も、御側に待ふ且元も、聞居たまひし淀

君も、半胸も張り裂く思ひにて、皆一同にうつふしぬ、果しなければ清  
 正は、心を鬼にとり直し、御暇申し出でければ、秀頼公は立たせられ、  
 中平爺よくと跡を追ひ、袖を引てぞ泣き給ふ、時勢リ猛虎を挫ぐ清正も、  
 幼き御子の腕には、引かれて元の座に歸り、秀頼公を抱きあげ、つくづ  
 く顔を見上げ、顔是なき秀頼公、うるむ目元に清正の、髯にすがり  
 て別れをば、惜み給ふぞいぢらしき、しやがて御所持の中啓を、かたみに  
 とらせ遣すと、下し給へば清正は、切り『聲も得たてず伏し拜む、嗚呼幼  
 君がかほどまで、慕ひ給ふも清正が、無二の心の誠より、あらはれ出づ  
 る光にて、君に仕ふる人臣は、斯くありてしものと思ふなり、切り』かく

ありてしものと思ふなり、』

○本能寺

麻と亂る、戰國の、中平人とし謂へは誰も彼も、馬を養ひ兵を練り、切り『糧  
 を收めて劍を磨す、』本比は天正十年夏五月、中平徳川家康封せられ、安  
 土城下に入りしかば、織田右大將信長は、いと鄭重に迎へんと、直に惟  
 任光秀に、中平饗應の役をぞ命ぜらる、御請致せし光秀は、亂れたる世に  
 心得し、都の手振見せばやと、さしも日出度勤めしを、小人輩の言によ  
 り、善美過分の評を受け、中平疑心暗鬼は信長の、胸にやどりし時も時、

羽柴秀吉中國より、援けの兵を請ひしかば、嚴命忽ち光秀の、首の上にぞかゝりける、光秀ひそかに思ふやう、人もあらんにこの我に、羽柴が命に従へとは、中干あな情なの我君やと、齒嚙をなして恨みしは、君に仕ふる人臣の、よもあるまじき事なれど、また信長を見る時は、右大將とも仰がる、身に、中干疎暴の振舞いと多く、或時は蘭丸をして、光秀の首に、鐵扇を加へさせ、また或時は、好まぬ酒を殊更に、中干我意を通して勧めしめ、志賀の都の領地さへ、三年のうちには事なくも、奪ひ取られむ説を聞き、今また産を傾けて、新たに來りし家康に、心づくしのもてなしも、琵琶湖の水の泡と消え、中干抑へし焰むらくと、もゆる思ひの

光秀が、大干拳を握りて立上り、中干動く眼の間より、由々しき大事のほの見えしを、露ほど知らぬ信長は、諸將を安土に止め置き、親ら近臣百餘人、引從へて京都なる、中干本能寺にぞ入りにける、時こそ來れと光秀は、田鶴も遊ばぬ龜山に、從子光春等を召しよせて、中干積る恨の數々を、數ふるうちに光秀が、眼は血汐ほどばしり、逆立つ髪は冠を、突く勢を見てとりし、光春どもが百千度、諫むる言葉も聞かばこそ、をして謀反に加盟させ、中干暴戻無道の弑逆を、企てしこそ淺ましけれ、かくて士卒を打揃へ、中國勢を援けんと、偽り向ふ大江山、心の駒も烏羽玉の、暗路を急ぐばかりにて、さしも忠義の光秀が、追ひく年も老の坂、如何

なる道や迷ひけむ、神平無念至極の胸の中、亂れて濁る桂川、渡らむ駒の足なみは、東指してぞ進みける、

本能寺

本能寺溝深幾尺

我成大事在今夕

糠糟在手交糠食

四簷梅雨天如墨

老坂西去備中道

揚鞭東指天尙早

我敵正在本能寺

敵在備中汝能備

こゝに始めて軍勢は、漸く二心と覺りしが、これも我が君是非もなし、すつる命は一つごと、時しも六月二日の朝まだき、露の身輕き軍兵が、本能寺をとり圍み、大平関を作りてぞ攻入りける、中平此物音に信長は、寢

覺の耳をそばだつれば、紛ふ方なき人馬の聲、館間近く聞ゆるに、枕を蹴て立上り、疾く見届けよとありければ、もりらん森蘭丸畏まり、表の方に走り出で、中平見越の松に片手をかけ、右手をかざして見てあれば、雲か霞か白旗に、染めたる桔梗の紋所、前見るより蘭丸引きかへし、光秀謀反と答ふるに、赫と怒りて信長は、ものども覺悟と呼はりて、弓矢おつとり立向ひ、寄せ來る敵をもものともせず、また、くひまに數十騎を、矢繼早に射て落し、勢鋭く防ぎしも、たゞ一筋と信長が、頼む弓弦ふつつと切れ、得たりとつけいる豪敵を、すかさず弓もて打て伏せ、兎角するうち信長も、左手の腕に痛手を負ひ、蘭丸代つて拒ぐうち、宿直の者も悉

本能寺

本能寺

く、命を的に戦へど、大平衆寡敵せず信長は、最早これまでとや思ひけむ、中平自ら館に火を放ち、烟の中に飛入て、及に伏してぞ果てにける、  
吟詠り嗚呼豪邁の信長が、空をも蔽はむ大鵬の、ほら圖南の翼中空に、あま燕雀の爲めに惱まされ、終世の望み絶えたるは、獅子身中の蟲に倒れたる、そしりりをうけて人皆の、口に残るも痛ましさ、つら續いて蘭丸を初めとし、坊丸りきまるのこ小性共、未だ若木の櫻花、嵐の山の朝風に、いとも床しき香をとめて、ちるやちりく、あとやささ、百有餘人もるともに、哀れ本能寺の、  
りり『朝の烟と消えにける、』

研ぎ得たる、心ゆるすな増鏡

思はぬちりのかゝる世の中、

つらく古今を按ずるに、人に君たる王侯の、心すべきは徳にこそ、

『心すべきは徳にこそ、』

○兒島高德

元弘二年如月の、中平小雨しとく、笠置山、あや黒白も分かぬ夜の風に、さして行手は楠の、りり『影だに見えぬ常闇に、』大平荒わたりたる人面の、中平心は鬼か蛇の如き、妖怪變化の賊共は、恐れおほくも、あま天皇の、あま龍駕を西の隱岐國、浪路遙に移しけり、其有様は今も尙、あま史上に見るだに身の毛

兒島高德

立ち、腸さへも寸々に、絶え入るばかりうるむ目に、中平古うらむ外ぞなし、大平其時兒島高德は、中平衆を集めて謂へるやう、仁をなす爲め身を殺し、義を見て爲すは勇なりと、勵ます言葉勵む武士、共々向ふ舟阪の、山の嶮阻はこれやこれ、天の興へし要害と、身を潜めつゝ、堅唾呑み、我わが天皇を奪ひ奉らんと、待つに甲斐なき鳳輦は、早や山蔭に向ひぬと、聞くより早く杉阪の、中平樹の根岩角踏碎き、望めば又も鳳輦は、遙に過ぎて後影、僅に拜むばかりなり、今ぞ挫けし兵士の、跡見送りて高德は、中平天を睨んで地に哭し、姿を變へて身をやつし、雨の晨も風の夜も、厭はず御跡慕ひつゝ、よき折あらば赤心を、我わが天皇に聞え上げ、おほき叡

慮を安め奉らんと、氣の張る弓は撓まぬも、守り厳しき板庇、隙さへ洩さぬ御姿に、差し足抜き足日本刀、櫻の老木かき削り、墨斗の墨の黒々と、赤き心を書きおろす、

天莫空勾踐

時非無范蠡

十字の文字は長城の、堅き固めや勤王の、中平しるすも賊はあきめくら、群り見るも明鴉、阿房くくと笑ふのみ、我が天皇は、龍顔いとも麗はしく、暫しの間、中平愁の御眉ひらかせ給ふぞ有がたや、かくの如くに高德が、虎の穴だも恐れなく、中平虎の子得んと思ひてし、勳は後の世にまでも、輝き渡りて曇りなき、明治の御代に愛國の、古きを尋ね新しく、

切り『護りの神とぞ崇めらる、』されば讀む人々心せよ、彼も人なり吾も人、食ふは今も古も、中平日本に實る瑞穂なり、飲むは昔も今日も、清き日本國の水、卑屈の腸洗ひ去り、國を枕に誠忠の、切り『樂と夢や結ぶべし、』

元寇

○元寇

聖人位にある時は、麒麟其國に出るとかや、明王政をなし給へば、英雄執權の職にあたる、鎌倉山の松の風、切り『浪の音かと疑はれ、』大平龜山院の秋の月、中平何をおぼるに霞むらん、西天遙に見渡せば、我にあだな

す仇の舟、群り集ふ誰や彼、蒙古の王忽必烈は、祖宗鐵木心の遺訓に基き、世界統一の大業を、其一代に遂げんとて、慳貪邪慾飽くことなく、天魔破句の狂威をふるひ、ウラルの東渤海の、北領土ならざる土地もなく、藩屬せざる國もなし、四百餘州を平げて、宗の天下を奪ひしより、貢するもの一千餘國、草も木も靡み従ふ其が中に、獨り東海の日本國、貢を入れぬのみならず、大平執權北條相模太郎時宗は、中平命に應ぜず使者を斬り、首を軍門に斬りかけて、六十餘州に號令し、防禦をさく怠りなし、忽必烈しんいの炎燃し、いざや日本を攻めつゝし、蒙古の領土となさんとして、大軍屢々進來す、文永の春弘安の秋、民の心は安からず、市に

元寇



米賣る商賈なく、里に飢よぶ窮民あり、續いて起る國難は、朕が不徳と  
 身をせめて、位を譲らせ給ひつる、龜山上皇聞し召し、いと、宸襟を惱  
 ませ給ふ、されば王城の地いと危し、御座を關東へ移させ給へと、申し  
 上ぐるもゆるさせ給はず、朕不徳の故を以て、此國難は起りつれ、民の  
 塗炭をあとに見て、いかでか朕のみまぬかるべき、王位は今上のしろし  
 めす、政事は鎌倉に執權あり、ありて甲斐なき此身なり、甲斐なき此身  
 打棄て、所替り棄て、甲斐ある事ならば、露玉の緒のをしからじ、さら  
 ばとばかり御手づから、御筆を染させ給ひ、神風や伊勢のみおやの大神  
 に、我命めさせ給ひて、此國難を救はせ給へと、深く御祈願こめさせ給

ふ、人には夫れと岩清水、ひとり御行と夕まぐれ、鳳凰のとばりを出で  
 させ給へば、御側に侍る人々は、龍衣の袖をおさへつ、いともかして  
 き玉體を、かるしめ給ふは何事ぞ、思し止めさせ給へと、申上ぐるを汝  
 等の、知れる處にあらずとて、長さ夜の、一と夜をこめし御參籠、大御  
 心ぞ有がたけれ、上にかゝる仁天の君あり、下義地の臣なからめや、  
 執權時宗の號令に、中干千軍萬馬猛者勇者、目にあまりたる大軍を、お  
 めず臆せず防戦す、頃は弘安四年閏七月一日、上皇御祈念滿願のあかつ  
 き、西九州の空、明けはるか一天俄にかき曇り、大地山河鳴動し、一陣狂  
 風大嵐、神軍天馬にむちうちて、魔王の城を攻むるが如く、浪は怒つて

高島の、沖に四千の蒙古の船、塵か芥か浪の上、群り集ふ十萬の、あだの命は大和田の、底の藻屑となりけり、太平執權時宗の果斷勇決、鎮西將士の忠勇無雙、中平此大勝を招きしは、謂ふも愚の事なれど、是れ偏に龜山上皇の、内因讎を忘れ、外大敵にあたらせ給ひ、身をも捨んの御宣命、至誠天地を感動し、祖宗の冥護神風と、なりて蒙古を吹拂ひ、切り『拂ひ清め給ひしなれ、』六百年の春秋を、枯れず萎まらず今の代に、昔忍ぶの語り草、切り『語り傳へて繁るらん、』

○那須與市

元暦二年、如月中旬の頃かよ、九郎判官源義經は、中平三百餘騎を從へて、屋島の内裏を守りたる、平家の軍を討んとて、切り『牟禮の方へと打て出づ、』太平此時平家方に於て沖なる船に、中平柳の五ツ重に紅の、袴着けし女房を、立出でしめて日の丸の、扇を艦に押し掲げ、之を射よとぞ招きける、此女房こそ、建禮門院の后立の時、千人の内より選られし、中平玉蟲の前とは知られけれ、十九の春を迎へ来て、かげん管絃や舞に至るまで、人に秀で、美しく、雲のびんづら月の眉、餘程氣高く見えにける、よしつねこうご義經公御覽候ひて、はたけやましげた畠山重忠を召され、中平これこそ我をおびき出し、一と矢に射留めむ謀、誰か射落す者やあると、尋ね給へば重忠は、

畏りて申すやう、下野國住人、那須與市宗高こそ、名を得たる弓矢の達人と承れば、これに仰付られ候へとありければ、直に宗高を御前に召され、如何に宗高、あの扇射よと宣へば、宗高承り、再三辭退申上ぐれば、中平義經公怒て申さる、やう、此度鎌倉を立出で、西國へ向はんづる人々は、皆義經が下知に背くべからず、この仔細を存せぬ者は、直に鎌倉へ歸るべしと宣へば、宗高も、今は辭するに言葉なく、御請いたして、中平御前をぞ退さぬ、宗高此時十七歳、常に勝れて華やかに、緋威の鎧着て、鍬形打たる甲の緒をしめ、足白の太刀を佩き、廿四佩たる截生の矢を負ひ、重藤の弓を持ち、葦毛の駒の逞しきに、洲崎に千鳥の飛散

たる、金覆輪の鞍を置き、其身輕げに乗りたるは、中平さも勇々しくぞ見えにける、頓て浪打際に乗し出し、弓手の沖を見渡せば、吉野の花か月が瀬の、梅かあらんかいはつ、じ、中平もゆるばかりの緋の袴、船より船に見え渡り、空燒の香は一陣の、屋島おろしにかほり來ぬ、妻手の方に敵兵が、弓矢長刀杖と突き、船の前後に立並び、陸には味方山風に、中平駒の黒髪けづらせて、轡を並らべ見詰めたり、大平宗高心に思ふやう、中平かゝる晴なる場所に出で、若しも此矢を誤たば、弓矢を折て割腹し、いひ譯せんと思ひつめ、扇の的を見渡すに、矢どろなく遠ければ、駒の手綱を搔繰て、海中へ颯と馳入り、腰のあたりの濡るまで、乗り入

那須與市

れたれど、あはいまだ遠き浪路をば、北風烈しく吹すさみ、逆巻浪の高  
 ければ、駒ははやりて狂へるを、手綱ゆりすゑく鎮むれど、鎮まり兼  
 ぬる駒の足、扇と共に定まらず、宗高運の極まりと、じつと目を閉ぢて  
 南無八幡大菩薩、下野那須の大明神、弓矢の冥加あるならば、何卒扇  
 を坐に定め給へ、源氏の運盡き、家の果報もこれ迄ならば、矢を放たぬ  
 其の先に、海中へ沈めさせ給へと、心に深く祈念して、目を開きて打見  
 れば、風も少しく吹弱り、駒も扇も静まりぬ、さては神力指添たりと、  
 宗高心勇みたち、鏑矢番ひて思ふやう、扇の面の日の丸は、目を射るの  
 恐あり、要のほとりを射切らんと、心静かに引しぼる、源氏の兵聲

聲に、今少し打入れ給へ、打入れ給へと呼はるを、更に耳にも聞入れ  
 ず、矢聲を掛けて切て放つ、矢音は浦々に鳴り響き、狙ひは違はず、要  
 際ふつと射切つたり、扇は空に舞ひ揚り、暫しが程はさまよひて、  
 海へ颯とぞ落ちにけり、折節夕日に輝きて、波に漂ふ有様は、立田  
 の山の秋の暮、初瀬の紅葉にことならず、敵も味方も此時に、  
 船を叩て鯨波をぞ揚げにける、痛はしや平家方敗軍と極まりて、西  
 國指して落ちて行く、心の内こそあはれなれ、嗚呼宗高が此日の譽  
 れ、幾萬代を経るとても、朽ちぬ程こそ目出度けれ、

那須與市

○頼朝七騎落

蛭が小島の浦浪に、中干、うき、艱難の年を経て、勢烈しく雨を呼び、雪を起  
 さむ潜龍も、切り『天に昇るの時を得ず、』大干石橋山に翻がへす、中干旗は嵐  
 に吹き折られ、ちりぐになりし散兵を、集むる力なくくも、頼朝主  
 従身を逃れ、眞鶴が崎にぞ出でにける、治承四年の秋の頃、遙安房路を  
 こゝろざし、身は捨るとも捨てがたき、股肱の臣を見返れば、田村信綱、  
 新開次郎忠氏、土屋の三郎宗遠に、土佐坊昌俊、岡崎四郎義實と、土肥  
 次郎實平、同遠平に、中干、頼朝を合せて八騎なり、頼朝は船中くまなく見

渡して、如何に實平、思出れば吾の祖父の、爲義公は保元の亂、父の義  
 朝公と申せしは、名のみ平治の戦に、主従八騎にて落ち給ふ、おもへば  
 われも八騎なり、至て不吉の徴なれば、中干、誰ぞや一人を下すべし、實平  
 つくぐ思ふには、いづれも君が御爲には、骨を埋めて其名をば、埋め  
 ざるべき忠臣のみ、誰を選ばんやうなげれば、陸地に近く居並たる、岡  
 崎四郎に談ずれば、四郎なかく聞入れず、吾の皮肉は落ちたれど、君  
 の爲めには老ひざるべし、その御先途を見とけるまで、いかでかこ、  
 を動くべき、此役は、二つの命持たれたる、御身の外に誰かある、某も  
 昨日までは、二つの命持ちたりしが、一つは君に捧げたり、それを如何

にと申しなば、石橋山の戦に、わが子の與市義忠は、敵の侯野と引組  
 で、終に討死致したり、親子は同體二つの命、見れば實平殿、親子諸共  
 おはさずやと、理の當然に實平は、忽ちわが子に命ずれば、遠平も、君  
 を思ふの一念に、父の謂ふ事聞かざれば、實平詮方つき果て、然らば  
 己殘らんと、謂ふを聞たる遠平は、半父をみすく、殺さむ事、子たるの  
 道にあらずとて、なくく命に従へり、かゝる處に、敵の大勢打出けれ  
 ば、實平猶豫もなしかねて、鎧の袖に降りかゝる、中平の雨を打拂ひ、  
 討死せよと謂ひすて、船のともづな切てけり、所替り覺悟の前とは謂ひ  
 ながら、君と父とに生別れ、便りなきさに鳴く千鳥、聲も悲しく聞えけり、

彼の松浦佐用姫も、此遠平も限りなき、千古無量の歎きをば、波の上をや  
 殘すらん、船のうちなる人々も、座ろに涙を催せば、中平鬼神をひしぐ實  
 平も、親子の絆は断ちがたく、胸にせきくるかなしみを、色にも見せじ  
 とあせる様、たとへて謂はむ方便なし、弓張月の影うすく、消る思の船  
 路には、沖なる波の音までも、鬨の聲かと疑はれ、覺束なくも主従共、  
 目ざす陸地も白雲の、うちより見ゆる兵船は、和田小太郎義盛が、ひそ  
 かに心を傾けて、君の行衛を尋ねんと、漕出したる船なれば、忽ち追付  
 きしかぐと、誠面にあらはれて、申出れば主従共、暗夜に燈火を得  
 し如く、打悦びて諸共に、程なく陸にぞ着かせらる、此時義盛申すや

う、いかに實平どの、御身の忠義は謂ふばかりなく、此義盛に迄日頃より、心をつくし給ひてし、報いの爲めと船底より、死せしと思ひし遠平を、差出しければ實平は、夢かとはかり驚きぬ、其驚はさる事ながら、昨日大場が手勢もて、君の御跡追ひける時、其軍勢に某も、まざれ込みつ、討て出で、渚に控ふる若武者を、見ればけなげの此御子息、中遠平殿にてありければ、忽ち駒を駈寄せて、生捕る體にもてなして、こゝ迄伴ひ候と、いと懇に謂ひければ、實平こをどりなして勇みたつ、居並ぶ人も頼朝も、皆よろこびを夕暮の、月の盃とりぐに、所望されつ、實平は、切り『起て一とさし舞ひにけり』、これ兵衛佐頼朝が、主從僅かた

七騎、落行く先も玉の緒の、身を捨てこそ浮ぶ瀬の、天運こゝにめぐりきて、源家の榮引起す、切り『始めとこそは知られけり、』

○鉢の木

水清ければ魚棲ず、申于濁れば眞如の月宿らず、れんけつ廉潔の士は世と隔たり、  
 『時に窮して節義あり』、大平佐野のわたりに降りしきる、申于雪は鷲毛の如く散り亂れ、人は鶴氅を着て徘徊す、一刻千金の雪景色、昔も今も變らねど、變り果てたる我が身に、徘徊すべきあし田鶴の、衣も朽て袖せばき、ほそぬのころもみ細布衣身にあはぬ、世を離れたる草の庵、申于今日の寒さを如何

にせむ、あな面白からぬ雪の日と、唧つ門邊に訪ふは、行衛定めぬ雲水の、沙門となりて鎌倉に、上りて見むと雪深き、信濃の假家あつてに見て、名にしおふ淺間嶽に立烟、消えむ思ひの肌寒く、吹くや嵐の大井川、捨つる身になきとももの里、今ぞ浮世を離れ阪、墨の法衣の碓氷川、下す筏のいたはなの、中干花と散りくる大雪に、行きなやみたる旅の僧、一夜の宿を頼みしに、いふせきなかの佗住、夜具さへ今は備はらねば、一度は辭していなみしも、又つくづくとあつさきを、思ひ返せばかくばかり、衰へ果つるも前世の罪、幸ひ僧とあるからは、宿して足を休ましめ、共にうき世を語らんと、扉押明け呼返せど、降る大雪に聞えぬか、中干あ、

痛はしの旅僧かな、過來し雪に道を忘れ、今降る雪に行衛を失ひ、一つ所にたゝずみて、艱苦と共に降り積る、袂の雪を拂ふさま、定家卿のものされし、

駒とめて、袖うち拂ふかげもなし、

佐野のわたりの雪の夕暮、

と謂ふ心にさもにたり、これは大和の三輪が崎、稱は同じ佐野なれど、ところ異なる上野の、佐野のわたりの雪の暮、手を引合てつれ歸る、竹の編戸のすさま洩る、草屋の風は寒けれど、盡す誠のあたゝかき、粟の餉に土釜の、湯氣に昔のしのばれて、中干たゞの人ともおもほえず、更け行



く鐘の聲凍る、半寒さ得たへず何をがな、焚木にせんと見返りて、ふと思付く鉢の木に、指し示し謂ひけるは、吾世にありし時、ひたすら是れなる鉢の木に、心をよせて育てしが、斯くおちぶれても梅が香に、櫻の色に常盤なる、松のみどりは捨てがたく、三鉢ならべて愛でしかど、もてなす方便もあらざれば、秘藏の念をこゝに断ち、凡て火に焚き参らせんと、鉢取出すを旅僧は、あわてゝおゝと留むれば、否とよ此身は埋木の、世に咲き出ることまた、あるまじものと思ふなり、傳へ聞く釋迦牟尼佛は、修業のためと雪山に、薪を採りし事もあり、御僧の爲めに焚くならば、これも同じく難行の、法の薪となりもせむ、なに惜まむと側

により、雪打拂へば笑み初むる、梅を切らんか香に迷ひ、櫻折らんか待ちかねし、春に逢はぬも哀れなり、いざ松にせん千代守る、操を破る心地して、何れをそれとわかち得ず、たゞ腸を断つばかり、かくては果てじと思ひ切り、三つの鉢の木火に焚けば、昨日の榮華も時の間に、烟とこそは消にけれ、僧は始終を打見やり、いづれ由ある人ならむと、強いて其名を尋ねれば、今は何をか包むべき、吾こそは佐野源左衛門尉常世なれ、中干、讒者に與みする奴輩に、領地を取られし成れの果、夢にも昔を見るならば、慰む術のあるべきに、無念の涙あふれきて、寢られぬまゝに夢も見ず、斯くまでおちぶれ果るとも、武士のたしなみ武具一

領、長刀一と枝、馬一疋、中平いざ鎌倉に事あらば、ちぎれたれども彼の具足、錆たれども此長刀、瘦たれども彼の馬に、打跨りて活を入れ、第一番に馳せつけて、君に命を捧げんと、兼て覺悟は動かねど、飢に勞れて死にもせば、黄泉の障り限りなく、實に口惜しき極なり、初めてあかす胸の内、勇も義もある大丈夫と、感じ入りたる明烏、ないて別る、旅僧は、北條五代の執權時頼が、警切て世を忍ぶ、最明寺入道とは、中平後にぞ思ひ知られける、

大平さる程に、鎌倉に於ては、急の勢揃ひを觸出され、中平東八ヶ國の大小名、曠着の鎧輝かし、黄金のべたる太刀を佩き、いと逞しき馬に乗り、雜

兵數多引具して、鎌倉入りのその中に、常世が常にかはりたる、馬武具や打物を、さぞや笑はんさりながら、子路にも恥ぢぬ所存ぞと、心ばかりは勇めども、勇みかねたる瘦馬を、打てどあふれど走り得ず、中平乗り力なく見えにける、扱執權よりの御諚には、中平こゝに集まる勢の内、ちぎれ具足に錆長刀、瘦たる馬をみづからに、引て見苦し武者あらば、呼出せよとありければ、誰にも見ゆる横縫の、破かゝれる古腹巻、中平諸將の笑も顧みず、少しも臆する氣色なく、その前にこそは出にけれ、時頼これを招きよせ、中平如何に常世忘れしか、いつぞやの大雪に、情の宿に預りし、旅僧なるぞ其時に、若し鎌倉に事あらば、身を抽で、參らむ

鉢の木

と、謂ひし言葉の偽か、真なるかを試さむ爲め、また馳上りたる諸將の内、訴事のあるならば、理非曲直もまのあたり、糺さむ爲めの勢揃ひ、誠の武士は汝なり、先づ沙汰の初めとして、其身が本領佐野の莊、三十餘郷を返すべし、時に何より切なりしは、路白妙の雪の夜に、秘藏の鉢の木吾が爲めに、焚き木となせし志、何時の世にかは忘るべき、それ其時の鉢の木は、梅と櫻に松の木の、三鉢ところそは覺ゆなれ、吾そのかへしをなさむ爲め、加賀の梅田に、越中の櫻井、上野の松ケ枝、これを合せて三ヶ莊、更に汝に與へんと、相違ありざる自筆の文、渡し給へは悦びの、眉を初めて開きたる、常世は昔にたちまざる、花の錦を重ね着

て、乗跨がれる瘦馬の、嘶く聲も勇み立ち、佐野の莊にぞ歸りける、誠もて、つき貫かば岩がねを、  
砕くも難きことやなからん、  
嗚呼末の世に生れたる、浮薄の人よ心して、佐野の常世に鑑みよ、恥るところの多からむ、  
『恥るところの多からむ、』

○白虎隊

花は櫻木人は武士、散るべき時に散らざれば、  
『いかでか人に惜まれむ、』  
大干ころに會津藩士の子弟にて、  
白虎隊と稱へしは、日新館の學生より

白虎隊

選抜したる人々にて、年齢僅かに十五六、十七歳をまだ超えぬ、忠勇義烈の少年なり、學の窓に筆をすて、劍を執て青天を、睨む姿の健氣にも、三十七人團結して、中干首將の許に馳せつけぬ、早や此時は若松の、わたりは敵の領となり、城內既に兵は盡き、残るはあはれ老若の、中干いともかよわき婦女子のみ、主君の安危を己が脊に、負うて其身を顧みぬ、少年隊は勇々しくも、決死隊の左翼となり、戸口の原に打向ひ、群がる敵に斬て入る、折しも吹くや暴風の、雨も一時に篠をつき、晝尙暗き修羅の場、雷鳴山嶽を振動し、忽ち放つ電光に、小兵の早業こゝかしこ、ひらめく影は白虎の如く、猛りに猛る少年が、息をもつがず戦ひしも、

寄せ来る敵は數多く、防ぐ味方は限りあり、僅かに一方を斬抜けて、大干生残るもの十餘人、慶應戊辰八月の、中干後の三日の東雲に、瀧澤峠の嶮を越え、數ヶ所の疵に迸る、血潮は踵の跡を染め、兵糧だにも續かねば、飢と疵とに勞れ果て、折たる刀を杖として、飯盛山に攀ぢ登り、鶴城遙かに見渡せば、黒烟天に漲りて、昨日にかはる今日のさま、憐れ望も盡き果てぬ、主君を初め奉り、我が父母に今生の、別れを告げんと跪き、涙ながらに伏し拜む、心のうちこそ憐れなり、「此時早く一人は、取出したる短冊の、母の賜ひし和歌一首、此世の別れと詠みあげて、我がこと既に終れりと、忽ち光る一刀を、中干小脇にぐつと突立て、物の見事に

白虎隊

引廻す、かたへの一人おくれじと、秋水逆手に我咽喉を、中東も通れと  
 貫きぬ、或は又腹刺違へて死せしもあり、其他も是と前後して、何れも  
 年は蕾なる、若木の花を誘ひ來る、あはれ無情の風吹きて、いと目覺し  
 く自害して、秋の錦を織る山を、中染むる血汐となりけり、これより  
 先に魁けて、戦歿したる少年の、屍を拾ひ集めきて、この大丈夫と相な  
 らべ、飯盛山の絶頂に、輝く碑銘は後の世の、士氣を鼓舞する基にて、  
 今に傳へて惜ざる、

少年團結白虎隊

國步艱難守堡塞

黃塵掩天白日暗

警報交至四海內

忽捲風雨大軍來

巨砲連發僵死堆

白虎一隊自虎健

殺生過當何壯哉

衆寡不敵戰且卻

身裹創痍口含藥

腹背皆敵今何行

杖劍間行攀丘嶽

南望鶴城黑烟揚

社稷已亡我事止

一死唯應償君恩

十有六人心肝鐵

遙拜鶴城淚潛々

意氣從容屠腹死

嗚呼天何ぞ大丈夫の、義氣と誠をこのまゝに、空しく暗に葬むらん、今  
 に其名は香りけり、萬生不朽の白虎隊、櫻の花のいさぎよく、散る真心

白虎隊

の紅は、紅葉にはぢぬ若葉ぞと、惜まぬものとしてなかりけり、切り「惜まぬものとしてなかりけり」

俊寛

○俊寛 上段

あだまもる、筑紫のはての薩摩湯、鬼界が島のあら磯に、治承元年夏五月、流され給ひし人々は、右近衛の少將成経、檢非違使平の入道康頼、法勝寺の執行、切り「俊寛僧都の三人なり」大平うき艱難を此島に、中干送り給ふ其うちに、大赦の令をぞ傳へらる、思ひもかけぬ事なれば、あら有がたき御誼やと、三人ひとしく跪き、うやくしくも令状を、おしいた

きて成経は、嬉しき涙に袖ぬれて、中干聲もふるへてさらりと、読み得給はぬ有様を、康頼とりてやうくに、読みあげ給ふ趣は、大平此度中宮御産の御祈禱に、中干非常の大赦行はる、により、鬼界ヶ島の流人のうち、成経康頼を赦免すと、読み給ふ時俊寛は、あつと驚き頭をあげ、何とて某が名を、読みおとし給ふぞと、言葉せはしく問はれしに、中干康頼も打驚きて聲うるみ、實にいぶかしき事なれど、御名は更に見え侍らず、俊寛聞て、さては筆者の誤りか、今一度讀ませ給へとありけるを、使の元康進みより、某都にて承はり候も、中干成経康頼の二人はお供いたせ、俊寛ひとり此島に、残し申せとの御事なり、嗚呼こは如何に何事ぞ、

俊寛

罪も同じく配所も同じ、非常も同じ大救なるに、ひとり誓ひの綱にもれ、沈むは何の因果ぞや、今日迄は、三人一所にありてすら、さもおそろしくすさまじき、荒磯島にたい獨り、離れて海士の捨草の、浪のもくずにあらねども、よるべも知らぬ浮き身やと、歎くにかひもなきなる、千鳥と共に鳴くばかり、思ひにあまる俊寛は、さきに讀みたる巻物を、い

くたびとなく打開き、あと繰返し見給へど、成経康頼とあるばかりにて中干僧都とも俊寛とも、かける文字は更になし、こは又夢かまぼろしか、夢ならば、さめよくと謂ひつけ、獨り涙にくれ給ふ、

玉兔晝眠雲母地

金鶏夜宿不萌枝

寒蟬抱古木

鳴盡不回頭

といふ詩の心は、俊寛僧都の身の上と、切り『今こそ思ひ知られける、』

○俊寛 下段

さる程に、時刻うつりてかなはじと、楫子の言葉にせかれつゝ、中干名残は更につまねども、成経は夜の衾を、康頼は法華經一卷を、各かたみに残しおき、さまざま慰め參らせて、船に乗らんとし給ふを、切り『俊寛袖にすがりつく、』大干元康聲をあらうげて、中干僧都は島にとまれといひ放つを俊寛は、嗚呼うたてやな公の、私といふ事あれば、せめては向ひの地

ま、で、な、り、と、も、情、け、に、乗、せ、て、つ、れ、給、へ、と、涙、を、袖、に、つ、み、か、ね、の、た、ま、  
 ふ、聲、の、終、ら、ぬ、に、あ、は、れ、無、情、の、楫、子、共、は、櫓、を、振、揚、げ、打、た、ん、と、す、俊  
 寛、今、は、か、な、は、じ、と、や、思、ひ、け、ん、す、が、る、袂、の、手、を、放、ち、一、時、は、宿、へ、歸、ら、む  
 と、踵、は、あ、と、へ、か、へ、せ、ど、も、か、へ、ら、ぬ、も、の、は、心、に、て、楫、子、の、無、情、も、元、康  
 の、怒、る、言、葉、も、打、忘、れ、申、ま、た、立、ち、よ、り、て、出、船、の、綱、に、と、り、つ、き、引、き、と、  
 ひ、る、楫、子、共、綱、を、お、し、き、つ、て、申、船、を、ふ、か、み、に、押、出、す、せ、む、か、た、浪、に、を、  
 ど、り、こ、み、船、よ、く、と、呼、は、れ、ど、か、へ、す、模、様、も、あ、ら、ざ、れ、ば、力、及、ば、ず、俊  
 寛、は、所、替、り、も、と、の、渚、に、ひ、れ、ふ、し、て、彼、の、松、浦、さ、よ、姫、の、歎、き、も、吾、に、及、ば、じ  
 と、悲、み、給、ふ、も、あ、は、れ、な、り、時、を、感、じ、て、は、花、に、も、涙、を、そ、ぎ、別、れ、を

惜、み、て、は、鳥、に、も、心、を、動、か、す、と、い、ふ、こ、と、あ、れ、ば、人、と、し、て、な、が、き、別、れ  
 の、悲、し、み、を、知、ら、ぬ、も、の、こ、と、な、か、る、ら、め、さ、れ、ば、成、經、も、康、頼、も、涙、な、が  
 ら、に、さ、し、ま、ね、き、わ、れ、等、都、に、上、り、な、ば、よ、き、様、に、と、り、な、し、て、申、や、が、て  
 御、迎、に、參、る、べ、し、心、強、く、待、た、せ、給、へ、と、宣、ふ、聲、も、か、す、か、な、る、頼、み、を、濱  
 の、松、蔭、に、聞、く、や、如、何、に、と、ゆ、ふ、浪、の、中、よ、す、る、ま、に、俊、寛、は、た、い、手  
 を、合、せ、頼、む、ど、と、呼、は、る、聲、も、呼、ぶ、聲、も、切、り、『次、第、に、遠、ざ、か、る、』船、も、か  
 す、か、に、人、か、げ、も、消、え、て、見、え、な、く、な、り、に、け、り、『消、え、て、見、え、な、く、な、り、に  
 け、り、』



○吉野落 上段

吉野落

美よし野の、花も龍田の紅葉も、中平夜半の嵐に誘はれて、あだに散りゆ  
く時はまた、りり『まして哀れに思ふなり、』大平茲に二階堂出羽の入道道蘊は、  
中平元弘三年正月に、六萬餘騎を従へて、大塔の宮の日頃より、籠らせ給  
ふ大和なる、吉野の城へと攻め寄する、菜摘川の傍りより、吉野の方を  
見上れば、白旗、赤旗、錦の旗、深山おろしに打靡さ、中平雲か花かとお  
やしまれ、麓には 敵の大勢すさまじく、甲の星を輝かし、鎧の袖を連  
ねしは、中平錦を敷くに異ならず、峯高ふして道細く、山峻うして苔滑か

なり、幾千萬の銳兵が、必死になりて攻るとも、中平たやすく落つべしと  
もおもほへず、藤かゝる所に、同十八日卯の刻より、兩陣互に鯨波をど  
つとあげ、敵攻上れば攻下し、互に勇氣を振ひつゝ、此處の谷、彼處の  
峯に馳せちつて、攻合ひ開合ひ、射手を揃へて散々に、射立たれども寄  
手の兵は、命を知らぬ坂東武士、親討れても顧みず、主倒れても取合は  
ず、屍を乗越え、七日が間、息をもつがず攻戦ふ、血は草芥を染め、  
屍は路頭に横たはる、かゝる所に、寄手の案内者岩菊丸は、足輕共に下  
知をなし、金峯山の嶮を越え、木の根岩角攀登り、在々所々に火をかけ  
て、鯨波を作つて攻めければ、城兵も、今は前後の敵を防ぎかね、自害

吉野落



○吉野落 下段

吉野落

さる程に、村上彦四郎義光は、餘り激しく戦ひて、敵に矢十六筋を射付  
 けられ、篋中の節や袖摺の、節より折て立たるは、枯野に残る玉萩の、  
 『風になびくが如くなり、』大干其矢を抜くにいとまなく、中宮の御前に  
 ひれ伏して、一の木戸は早や破れ、今二の木戸にて支ふれど、連日の戦  
 に、軍兵共は打死し、とても籠城覺束なし、敵四方を圍ぬうち、早く落  
 させ給ふべし、臣は恐多き事ながら、召させられたる御直垂や、御物の  
 具を頂戴し、御諱をも犯し參らせて、こゝに戦死を仕らんと、中忠義面

にあらはれて、いと懇に申上れば、宮はあはれに思召し、いかでか去る  
 事のあるべきぞ、死なば所をかへずして、吉野の山に芳ばしき、中名を  
 残さむと宣へば、義光聞きもあへず、嗚呼淺ましき仰かな、昔漢の高祖  
 が、瑩陽に圍れし時、紀信高祖の真似をなし、楚を欺かむと請ひたりし  
 に、中高祖はこれを許したり、これらの御覺悟あらせられずして、天下  
 の大事を、中よくもおぼしたり、早や御物の具下し賜はれと、御  
 鎧の上帯を解き奉れば、宮も實にとやおぼしけむ、御鎧も直垂も、  
 がせ給ひて義光に、手づから渡し宣ふやう、われ若し生のびたらば、汝  
 が後生を弔らはむ、又打死なしたらば、同じ冥土に伴ふべし、これ今生

吉野落

の別れごと、言葉少なく宣ひて、涙ながらに落させ給ふ、義光もせきく  
 る涙を押へつ、木戸の櫓に走上り、大音揚て名乗るやう、幸我は是  
 れ、神武天皇より九十六代の孫、幸今の帝の第三の皇子、一品兵部卿尊仁  
 親王なり、逆臣輩になやまされ、恨を泉下に報いむ爲め、只今自害する  
 所なり、これを見て汝等が、身に備へたる武運盡き、腹を切りん其時の、  
 手本にせよと呼はりて、幸鎧を脱で投落し、錦の直垂に練貫の、幸二重小  
 袖を引きくつるげ、幸兩肌ぬいで一刀を、幸左の腹へぐつとたて、眞一文  
 字に引きまはし、朱に染みたる腸を、櫓の板に投付て、太刀先くはへう  
 つ伏しに、伏して果てたる義光が、最後のさまこそ勇しけれ、敵兵これ

を見て、大塔の宮は、御自害召されたり、御首賜はらんといふまゝに、  
 四方の圍を打すて、幸中櫓のもとに走集る、宮はこれと引ちがへ、天の  
 河へと落給ふに、幸敵五百餘騎、道をさへぎりければ、義光の一子、村  
 上兵衛藏人義隆は、父が教に従て、一人茲に踏止まり、追來る敵の馬の  
 もろ膝、薙ては切りすゑ、平頸打ては刎落し、右へ突きのけ左へ蹴倒し、  
 飛鳥の如く飛廻り、猛虎の如く猛りたて、九折なる細道に、五百餘騎を  
 引受けて、半時ばかり支へしが、幸大平いかに義隆強の者とはいへ、幸身鐵  
 石にあらざれば、深手の矢疵十餘ヶ所、薄手の疵は數知れず、今はこれ迄  
 とや思ひけん、とある竹叢に走入て、幸腹搔切てぞ失にける、此ひまに、

宮は虎口を遁れ給ひ、高野山へ落延給ひしは、村上父子が美よし野の、  
 花と散りにし其勤功、龍田の秋の紅葉の、赤き心によるとかや、切り『赤き  
 心によるとかや、』

○小敦盛 上段

祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響あり、娑羅雙樹の花の色、生者必滅の  
 理を顯はす、驕れる者は久しからず、貴き人も、切り『終には亡ぶる習わ  
 り』  
 されば此度源氏平家の戦に、平家方一族、母衣大將の其うち、  
 物の哀れを止めしは、無官の太夫敦盛とこそは聞えけれ、敦盛其日の打

扮は、殊に勝れて華やかに、先づ肌よりは、梅の匂の肌寄せに、唐紅を  
 召されたり、練緯に、鶴縫うたる直垂に、萌黄匂の着脊長に、鍬形打た  
 る兜の緒を締め、黄金作りの太刀を佩き、二十四佩たる截生の矢を負ひ、  
 朱の塗籠藤の、弓を横たへ母衣かけて、連錢葦毛なる駒に、梨地に花の  
 蒔繪したる、金覆輪の鞍置かせ、御身輕げに召されしは、中々も勇々し  
 くぞ見えにける、御一門と同じく、主上の御供めされ、濱に下らせ給ひ  
 しが、御運の末のかなしさは、御父經盛卿より譲り給ひし、さえたこと云  
 へる、漢竹の窈窕を内裏に忘れ、すて、も御出あるならば、かほどの事  
 はあるまじに、彼の窈窕を忘れ置く事、敦盛が末代までの、恥辱を思召

小敦盛

し、取りに歸らせ給ひしが、かなたこなたと、時刻をうつす其ひまに、御座船も兵船も、中干、遙の沖へ押出す、痛はしや敦盛は、詮方なくも鹽屋の方を心掛け、駒に任せて落させ給ふ、中干、心のうちこそ哀れなれ、大干、これは扱置きこゝに又、中干、源氏方にて、熊谷次郎直實と申せしは、此度一の谷の先陣を承はれど、未ださまでの功名も顯はさず、無念至極はなかりけり、天晴こゝに、良き敵の通れがな、引組で功名せばやと思ふ折節、遙に敦盛を目にかけ、駒引寄せ打乗て、鹽屋を指て急ぎ行く、やがて直實大音あげ、大干、それに落させ給ふは、平家方にてても良き御大將と見奉る、中干、斯く申す某は、武藏の國の住人、私の黨の旗頭、熊谷次郎直實とて、源

小敦盛

氏方にてても隠れなき良き敵に候、正ならも、敵に後を見せ給ふものかな、早や引返し御勝負候へ、見參せんと、扇を揚げて招きける、哀れなるかな敦盛は、熊谷とは聞きながら、更に耳にも聞入れず、落つる味方の兵船を心かけ、中干、駒を早めて急がせ給ふ、さる程に敦盛、遙かの沖を御覽するに、御座船間近く寄せければ、斜ならず悦び給ひ、腰より日の丸の扇をぬきとりて、沖なる船を招かせ給へば、船中の人々の其うちに、門脇殿御覽じて、伊賀の平内左衛門基國を御側に召され、中干、如何に基國あれを見よ、母衣掛武者の船を招くは、左馬頭行盛か、又は無官の太夫敦盛か、いづれか見よとの御誼なり、悪七兵衛景清承り、某見定め參らせむと、

白柄しらへの薙刀なぎなた追取杖おとりつえにつき、舷うなべりにつと立ち上り、兜かぶとを脱ぬいで、磯邊いそべの方かたをつくくくと打守りうちまも、嗚呼痛あゝいたはしの御事おんことやな、あれは正まさしく、參議經盛卿さんぎつねもりきやうの御子おんこ、無官むかんの太夫敦盛卿たいうあつもりきやうにて渡わたらせ給たまふ、何なにとて御座船ござせんには、後おのれさせ給たまひしぞ、御馬おうまの毛色けいろ、兜かぶとの前立まへだてに至いたるまで、違ちがふ所ところはましまさずと、咽むせびかへつて申上まをしあれば、門脇殿かどわきどの聞きし召めされ、敦盛あつもりならば此船このふねを、中ちゆう早はやく寄よせとの仰おほなり、水主すゐしゆかん楫取かぢとり畏かしこまり、俄にはかに楫櫓かぢをとり直し、船ふねを磯邊いそべに寄よせんとすれど、此内このうちより吹續ふきつきたる、北風きたかぜの烈はげしくて、渦卷うづまく浪なみはさながらに、雪ゆきを頂いたぐ富士ふじの嶺ねの、中ちゆう落おち重おもなるが如ごとくなり、小舟こふねならばおのづから、弓手ゆんで妻手めてにも、押おし廻まはさるゝものなれど、殊ことに勝すぐれし大船たいせんに、し

かも大勢おほせい召めされたり、揖子かこ共力どもちからを盡つくせども、逆卷さかまく浪なみにせかれつゝ、磯邊いそべに寄よせむ様やうはなし、敦盛あつもりは此狀このさま御覽ごらんじて、扱さてこの上うへは是非せひもなし、我わが乗のる駒こまを泳およがせて、船ふねに乗のらんと思召おほしめし、駒こまの手綱たづなを搔か繰くて、海中かいちゆうに颯さつと駈入かけいり、浮うきつ沈しづみつ、五反たんばかり出いでたりしが、駒逸物こまいつちつとは申まをせども、荒あれに荒あれたる浪なみの上うへ、中ちゆう泳およぎ兼かねねてぞ見みえにける、熊谷くまが此このさま見みるよりも、大音揚だいおんあげて呼よはるやう、中ちゆう如何いかに平家方へいけかたの御大將おんたいしやう、召めさんとおぼす御座船おんざせんは、此浪風このなみかぜに隔へてられ、とても叶かなはせ給たまふまじ、返かへへし給たまはぬものならば、中指ちゆうしゆ一筋ひとすぢ參まらせんと、弓矢ゆみや番ばんひて控かへける、敦盛あつもりは見みそなはし、若もしも一ひとと矢やを射いさせては、末代まつだいまでの恥辱ちじよくなり、こゝにて

小敦盛

勝負を決せんと、相圖をなして、駒の手綱を引きかへし、海中より颯と  
 駈け上り、截生の鏑矢打番ひ、斯くなん詠じ給ひける、  
 梓弓、矢をさしわけて引く時は、

返す心を知るやその君

と遊ばし給へは熊谷も、心ある弓取なれば、はつと心にこたへ、雙の鏡  
 を蹴張り、やがて返歌に、

いたづきの、はやはづれんと思ひしに、

矢といふ聲にたちどとまる、

と返歌をなして、心靜かに待ちにけり、

○小敦盛 二段

さる程に敦盛は、やがて打物の鞘をはづし、熊谷に打てかれば、直  
 實しつかと受留め、追つ追はれつ、受けつ流しつ、こゝを先途と火花を  
 散らし、面も振らず切り結ぶ、未だ勝負も見えざるに、敦盛はいざ組ま  
 ると、打物なげ棄て、勢するどく駈け寄るを、直實得たりと兩手を伸し、  
 馬上ながらもむづと組み、互にかはす聲のうち、一度に鏡を踏みはづし、  
 兩馬が間にどつと落ち、幸上を下へと返しける、中痛はしや敦盛は、心  
 は猛く勇めども、剛氣の熊谷、物の數とも思はねば、こゝろやすく取て

小敦盛



押へ、御首搔むとしけれども、餘り手弱く思ひ、さしうつむいで、御相  
 恰を見奉るに、薄化粧して、鐵漿黒なる有様は、殿上人の年の頃、十六  
 七と打見えて、眉目は嬋妍たり、緑の髪はさながらに、空蟬の羽の如く、  
 窈窕たる其姿、嚙瞭たる其聲は、たとへて見れば業平の、片野の野邊  
 の狩衣の、半袖打拂ふ雪の下、翠黛紅顔錦繡の粧、晝にうつさんと思ふ  
 ても、中々筆につくすべさ、餘りの美しくさに熊谷も、いと哀れの身  
 にしみて、少し引寛るげ參らせて、扱は平家方にて、如何なる御公達に  
 て、渡らせ給ふやな、御苗字を名乗らせ給へといひければ、敦盛は熊谷  
 に組敷かれ、世にも苦しさ息をつき、武藏の國の熊谷は、文武二道の

士とこそ聞さつるに、何とて合戦に、法なき事を申すやな、我は平家の  
 門葉として、月卿雲客の席に連なり、詩歌管絃の道は知りつれど、此三  
 年が間一門の、武運つたなくて、いとわがれしより、半武士たる道を  
 あらう承るに、陣頭に駒の手綱を搔繰つて、打物互に抜きはなち、我  
 は何國の何某と、名乗つてこそ勝負は致すなれ、只今敵に組敷かれ、下  
 まり名乗るといふことは、今こそ初めて承はる、直實始終を聞き終り、  
 仰せはさなれども、御苗字を伺ひ首をとり、此直實が譽れをば、半顯は  
 さむとの所存なり、敦盛仰に、夫れは隠れもあるまじよ、たゞ某が首をと  
 り、御邊の主の義經に見せ給へ、若しも義經見知らずば、蒲の冠者に見

せて問へ、蒲の冠者も見知らずば、此度平家方より、生捕の者も多くあるべし、其者共に引合うて、誰が首とも分らずば、其時こそ、名もなき者の首と思ひ、申た、叢へ捨給へ、直實承り、扱はなかく武士の、勇める法を、委しく知ろし召されたり、世に憂きものは我等にて候、君の仰に従ひて、御首給はらんとすれば、申親と戦ひ子と争ひ、花の下なる半日の影、月の前なる一夜の友、清風朗月の夜に、飛花落葉の如くなり、此度の合戦に、熊谷が参り合ふ事、前世の宿縁と思召し、御苗字を名乗らせ給ひなば、御奉公の其爲めに、申後世を弔ひ申すべしとありければ、敦盛は、名は何時までも、名乗るまじとは思ひ給へども、後世を

弔はれむ嬉しさに、申我を誰とか思ふらん、申我こそは、参議経盛が末子、無官は今仮名にて、太夫敦盛とは某なり、今年歳は十七歳、軍は今日が初なり、さのみ物を尋ねずに、はや首とれや熊谷とありければ、直實聞て涙を流し、さては無官の方にて渡らせ給ふやな、某が一子小次郎直家も、今年歳は十七歳、扱は御同年にてましませしや、直家も此度、一の谷の戦にさきがけいたし、弓手の腕に矢を射られ、某に打向ひ、此矢を抜て給はれと申せしを、直實ともある弓取が、敵と味方の其中にて、心弱くと思ひ、申如何に直家、其手が深創ならば、駒より下りて自害せよ、薄創ならば敵と引組で討死いたせ、私の黨の名を汚すなど、はつ

と睨みしに、某が方を一と目見て、敵の陣所へ駆入りし、後ろ姿を見  
 しばかり、申す今二た目とは見ざりけり、かほどかほどあるさへ、心にかゝる  
 は親心、經盛卿と申さむも、今日までは花にもまざる若君を、磯邊に一人  
 御殘し、さぞや歎かせ給ふらん、哀れ此直實が、つれなき命ながらへて  
 武藏に歸り直家が、討死せしと申しなば、誠に母が悲まむ、經盛卿の御  
 心、直實が心にくらべ、何にたとへむかたもなし、哀れ貴きも賤きも、  
 子を思ふ道に迷ふとは、今身の上に知られたり、我れ此君討ち奉つりた  
 りとも、負くべき軍に、勝つべきやうもなし、又助け奉つりたりとも、  
 勝つべき軍に、負くることもよもあらじと、心に思ひ定めつゝ、如何に

若君、御歸陣の其後に、武藏國の熊谷と引組で候ひしが、我が子の小次  
 郎に思ひかへ、助け参らせ候と、御父經盛卿によく御物語り候へと、  
 いふより早く引き立て、鎧につきたる塵打拂ひ、駒引寄せ乗せ奉り、直  
 實共に馬に乗り、暇乞して四五町ばかりは見送りしが、崩れ後の山の鯨波  
 の聲、誰ならんと見返れば、弓手の方には森田平山控へたり、妻手の方  
 には虎江殿、續て佐々木四ツ目の紋の旗を押立て、山の上には御大將、  
 九郎判官源義經、浪吹きまくる濱風に、源氏の白旗打靡かせ、其旗下に  
 は、龜井、片岡、伊勢、駿河、武藏坊辨慶を初めとし、數多の軍兵聲々  
 に、武藏國の熊谷は、敵を組織ながら、今をめぐりと助くるは、必定逆

心とおぼへたり、二心あらば、熊谷共に打取れと、呼び立てければ今は  
 又、直實も詮方なく、幸扇を揚げて招きよせ、幸あれ御覽候へ、如何に  
 もして、助け參らせ度くは候へども、うしろの山の聲のみならず、早や  
 土肥梶原は、兵を引具し進み來る、最早逃らせ給ふまじ、あはれ願はく  
 は、直實が手にかけ奉り、後世を弔ひ申さむと、涙ながらにいひければ、  
吟敦盛は咽びかへつてうるみ聲、こゝを逃れ行く先にて、賤しき者の  
 手にかゝり、面を晒さんも無念なり、かゝる義理ある武士の手にかゝり、  
 死する命は惜しからぬ、早や首とれや熊谷と、西に向ひ手を合せ、覺悟  
 極めておはします、お鬼を欺く熊谷も、いづくに太刀を立つべしとも覺え

ず、心も亂れ氣も消えて、途方にくれて居たりしが、斯くてあるべきに  
 あらざれば、氣を勵ましてむづと組み、兩馬が間に引下し、敦盛の花の  
 首を、中水もたまらず打落す、さすがに猛き熊谷も、御死骸に取りすが  
 り、前後も知らず泣き入りたり、弓矢の家に生れずば、かゝる憂き目は  
 見ざりしに、哀れなるかな熊谷は、味方の兵も近寄れば、さまじく心取  
 りなほし、御死骸を抱き起せば、弓手の方には巻物一卷、妻手の方には  
 錦の袋に入れられし、漢竹の窈窕に、扇を添へてさゝられたり、やがて敦盛  
 の、御死骸を葬り奉り、御首と巻物、漢竹の窈窕を取りあげ、駒引  
 きよせ打乗て、大音揚げて名乗るやう、大平家方の一族母衣大將の其